

特集 売春は悪いのか？

「売春を語る」ということ

石川結貴

セックスワーカーを  
「貶めない」性教育を

鈴木水南子

社会現象としての  
「援助交際」を考える

川畑智子

「日本の」フェミニズムをつくるために

堀田碧

# We

8・9

1997

くらしと教育をつなぐWe



女と男の家庭科新時代

尾木直樹(教育評論家)著

# 学校溶解

## 新たな共同体への陣痛

★社会問題を教育の問題に、教育の問題を社会の問題に!!

★学校が溶解(メトルダウン)している。近代国家明治百年の学校制度が金属疲労をおこしている。学校は、大人たちは、どう変わらなければいけないのか。学校のシステムは、どう変えなければいけないのか。明るみに出た数々の事件から、閉鎖社会学校の21世紀の姿を模索する。子をもつ親・教師にぜひすすめたい一冊。

●目次から

第一部 深刻・多様化する学校溶解

- 1 急増する教師の「H」事件
- 2 自殺予告の脅迫
- 3 たまごっち恐喝
- 4 タガール刺傷事件
- 5 コギルの性非行
- 6 マサルPの覚せい剤
- 7 中三男子が女子同級生暴行
- 8 人権無視の集金張り紙
- 9 二倍も高かった指定学生服
- 10 P.T.A校内巡視
- 11 平手一発二五万円
- 12 “サティア”的異空間

部活動事件

第二部 学校溶解の元凶

「いじめの典型構造」

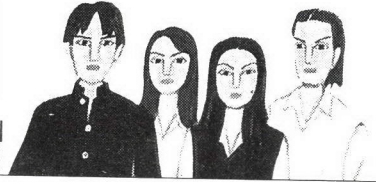
- 1 国民的関心はいじめ
- 2 見落としはじめのサイン
- 3 いじめっ子、少年院送り
- 4 いじめ自殺、第二のピーク
- 5 わずか五日間に五人も自死
- 6 同級生の退学決議 いじめ
- 7 いじめ防止が暴走
- 8 文部省も本気に
- 9 フロッキーに遭言
- 10 エビローク・学校溶解

新たな共同体への陣痛  
二十一世紀の学校共同体を  
ともに考えませんか

いま 尾木直樹著 ●税込定価1631円  
**現在を生きる中・高生** ●心の居場所  
 中・高生の立場から、現代社会・大人・マスコミを鋭く突く!

日本書籍

〒112 東京都文京区小石川  
4-14-24 ☎03(3813)8111



.....知りたい情報載せて10日おきに届きます.....

さべつ・おんな・アジア  
 はたらく・がっこう・老い・  
 たべもの・からだ・かんけい・  
 かんきょう・映画・CD・  
 自分史・マンガ・読者の声・  
 書評・マンガ・催し.....  
 集会・催し.....



創刊50年をすぎました。  
 女の視点で創る  
 もう1つのメディア  
 全国の草の根の動きを  
 つたえます。

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ

年間購読料 9000円  
 東京都渋谷区神宮前3-31-18  
 Tel 03(3402)3244.3238  
 FAX 03(3401)3453  
 Tel 06(371)2429(大阪支局)

女たちの情報紙  
**ふえみん**  
 f e m i n  
 婦 人 民 主 新 聞  
 WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

97年8/9月号

くらしと教育をつなぐ

We

◆ 特集 売春は悪いのか? ◆



Tami

☆ 「日本の」  
フェミニズムをつくるために 堀田 碧 ……………21

☆ みにくいアヒルの子が世界を散歩 許 家玉 ……………28

## 連 載

● シネマの魔 武田 秀夫 ……………44

● いきいきごんぼ 桑田 良彦 ……………48

● 変な子じゃないよね 滝野澤直子 ……………50

● このままではいけない? 吉原 令子 ……………52

● リレーエッセイ  
セックスレスなわたしたち 泉 万里 ……………54

● 蔦森樹の巡業日記 蔦森 樹 ……………56

● 居場所考 水田 宗子 ……………57

● おんなが歳をとるということ 木村 栄 ……………60

☆ 今、大人はおそろしい 久田 邦明 ……………61  
少年の暴走に歯止めをかけられなかったのはなぜか

◇ 編集後記 …………… 64

## 特集 売春は悪いのか？

- ★ 「売春を語る」ということ 石川 結貴 …………… 4
- ★ セックスワーカーを  
「貶めない」性教育を 鈴木水南子 …………… 8
- ★ 社会現象としての  
「援助交際」を考える 川畑 智子 …………… 14

## 女と男の家庭科新時代

- フェンスを越えて 小平 陽一 …………… 32
- 私の家庭科—ラフスケッチ 梶原 公子 …………… 33
- 家庭科—風がかわる匂いがかわる  
「自分」探し—<異性にききたいこと>を通して 分校 淑子 …………… 37
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 …………… 41
- 楽市楽座 加藤 昭仁 …………… 42

特集 売春は悪いのか？

「売春を語る」ということ

石川結貴

「売春を語る」ということ——こんなタイトルを付けておきながらいきなり無責任だけれど、私は売春をテーマにワイワイと議論する人たちが、あまり好きになれない。私程度のオツムでは、売春の概念とか歴史とか、「国連の定義では……」といったむずかしい漢字がいつぱい出てくる資料を理解できないことが、一番の理由かもしれない。

フーンなるほどねえ。やっぱり売春ていけないことなんだあ、とぼんやり思いながらも、アレツ待てよ。それなら売春という行為にク思い当たるフシがある私クは、ものすごくいけないヤツで、とてもじゃないがお天道様

の下を歩いたもんじゃない。それからもちろんもつと悪いヤツは、私を金でどうしようとした男たちってことになる。アイツらなんか「女性の人権を踏みじった」という理由で、牢屋に入れられたって不思議じゃないのか。つまりもしも売春が悪と仮定されるなら、かつて私がああ街で見たもの、聞いたもの、そしてこの身で体験してきたことは、同時に悪と仮定されなければならないのだけれど……。

今から一五年前、私は風俗街で働いていた。仕事はキヤバクラ嬢。ホステスである。風俗に詳しくない人のために少し解説しておく、ひとくちに水商売と言われる

ものにも、その内容にはさまざまなものがある。クラブ、キャバレー、パブ、スナック、ヘルスやソープランド。クラブと言ってもシャンデリアきらきらの超高級会員制から、スナックの内装と大差ないミニクラブまで、ランク分けしていたらキリがないほどだ。

私の働いていたキャバクラとは、キャバレーとクラブの中間的な店だった。何が中間かと説明すると、箱（店の規模）、値段（飲み代）、女の子（ホステスや男性従業員の質）などが、クラブには及ばないが、キャバレーよりは上というものだ。

私は一九歳でこの店に入った。正確に言うと、一八歳の時、同じ系列の高級クラブで少しヘルプ（指名に関係なく働くホステス）をやっていた。その時の店長に再びスカウトされて、今度はもう少し気軽に（？）働けるキャバクラで、指名ホステスをするようになったのだ。

その頃の私はお金が欲しかった。詳しいことは書かないが、好きな人と生きるために、どうしてもまとまったお金が欲しかった。今考えると、その理由はバカみたいなものだったかもしれない。しかし当時の私には、その恋が生き甲斐であり、そのために必要とあらば、どんな方法を取ってでも、お金を稼ごうという決意があった。

こうしてキャバクラ嬢として、私はパンプスとおミズスーツ（柄ものやラメ入りなどの派手なスーツ）に身を包み、喧騒あふれる夜の街で、「No.71・朝香」（源氏名）となった。

さてホステスの仕事というと、普通はどんなイメージを持たれるだろう。ニッコリ笑ってお酌をしたり、サツと煙草に火をつける……などというのは浮かびやすい。お客様にしなだれかかったり、一緒にダンスをしたり、帰りのタクシーまで見送りして「ありがとうございました」と頭を下げる光景なども、よく知られているだろう。

それらをホステスたちはなんともない顔をしてやっているが、実際はち密なほどのマニュアルがあったり、酔ったふりして絶対に酔っていない頭の中でバチバチと計算したりしているものだ。口から出まかせでおべんちゃらを言い、あとさき考えずバカ騒ぎするのがホステスだと思ったら、大間違いと言っている（そういう人も少しはいるけれど）。

私はこういう水商売の内幕、あの華やかで奔放な世界が、実は非常に効率よく経営されていたり、冷静に計算されていることを少しずつ知るようになる、ホステスという仕事が、俄然「人生勉強」と思えるようになった。

何よりそこで働く人たちは、ホステスはもちろん、男性従業員、調理の人、バンドメンパー。みんなこの仕事で「食べている」という現実がある。ケンカや妬みや足の引つ張りあいは日常茶飯事あるけれど、涙やがんばりや喜びだって、いっぱい感じる事ができた。あたりまえの人たちが、ただこの場所を働く場所と決めて、生きていたのだと思う。

そしてその場所に来て、飲んで話して笑って、時にはおサワリしたり、からんだり、ゲロを吐いていたお客様たちだって、ほとんどの人は普通の、あたりまえの日常に生きる人たちだった気がする。

あたりまえの私たちホステスと、普通の人であるお客様たちが、お金を媒介してセックスをしたら、それはやっぱり売春で、悪いことで、決して許されない（許してはいけない）ことなのだろうか。

私の忘れられないお客様のひとりに、こんな人がいた。工場勤めで、たいした給料でもないのに、足しげく店に通うのだ。ホステスの方が（支払いを）心配して、ビールで済ませようとしても、無理してもボトルを入れる。一回来れば、給料の四分の一くらいは飛んでしまうと思うのだが、彼は「遊びたい」と言って羽振りをきかせた。

私はいつしか彼のお気に入りとなり、いつも指名を貰うようになった。そしてその指名とは、ホステスとしての指名であると同時に、セックスへの誘いでもあった。

お客様からのセックスの誘いは、何も彼に限ったことではなく、いくらだってころがっているものだ。それをうまく切り抜けたり、また言葉は悪いが利用したりして、水商売は成り立っていてもいる。だから彼が、「いくら払ってもいいから寝たい」とあからさまにお金でセックスを誘ったことは、そう珍しいことではない。ただ彼が他のお客様と少しく違っていたのは、「お金を払わないと、誰も僕とはしてくれない」と言ったことだ。

彼は足が不自由だった。障害者というべき人かもしれない。今まで一度も、いわゆる恋愛というものはしたことがないし、これからおそらくできないだろう、と嘆いていた。彼にとってお金とは、彼なりの誠意だと私は感じた。その判断が間違っていたかどうか、今も答えは出ない。ただ実際問題として、彼には性欲があり、けれど健全な恋愛でそれを叶えることができず、もちろん誰かを無理やり犯してしまふことなんて絶対にできず、じゃあいつたいどうしたらいいのだろう……と、彼なりに悩んでの「お金」であったと思う。



また私にしても、自分は水商売の世界に生きていて、すなわちそれはお客様のスケベ心を利用しているような側面もあるわけで、キレイ事ばかりを言っているわけにもいかなかった。ホステスはお客様を店に來させて、酒を飲ませて、楽しい気持ちにさせてナンボ、なのだ。

その時の彼の気持ち、心の深い部分は、私にはわからない。お金を経て、私とのセックスを得た彼が、幸せになれたのか、楽しい気持ちになれたのか、誰にもわからないと思う。ただひとつ私が思うのは、あの時の彼に、「アンタは障害者なんだから、セックスなんてできなかつたつてあたりまえなんだよ！」と、いったい誰が突き放すことができただろうということだ。少なくとも私にはできなかつた。なにより私にとって、彼は々いいお客様であり、私はホステスとして、これからも彼にはそうやって欲しかった。

幸か不幸か、私は風俗街と呼ばれる場所で、いろいろな経験をした。この身で、その場所の風が冷たいか、強いかな、あるいはなんてことなかつたか、感じてきた。それは私の感じ方であり、百人の働く人がいれば、百通りの感じ方があるはずだ。悲しい人もいるだろう。傷ついている人もいるだろう。でも一所懸命生きている人もい

るし、生き甲斐を感じる人もいる。

売春を語る人たちは、そんな人たちを何人知っているのだろう。あるいは、そこで生き、働く人たちの本当の深いところを、どれだけ々わが身に照らし合わせて々考えることができるのだろう。

崖の上から下を覗いて、「あらあ、寒そうねえ」とか「あんな所にいたらポロポロになるわ」とか、々言うだけ々なら簡単だ。けれどその崖の下で、立派な誰かが吐いたゲロを洗うボーイがいたり、着服したお金で大盤振る舞いするバカの相手をするホステスがいたりすること。どもる人、ひどい傷痕のある人、アソコの小さい人などなど（特定して差別しているわけではない！）の人たちと、お金を介してセックスする人がいること。現実を、々言うだけ々の人たちはどう考えているのだろうか。

同じ場所に降りて来いとは、むろん言わないし、理論は理論であつていいと思う。しかし「現実」を「現場」を、見る目、聞く耳、知る努力だけは持つていて欲しい。そしてもし売春を語るなら、それですべての売春が語れると思わずに、たまたまひとつの形に他ならないことを、きちんと知つていて欲しいと思う。（いしかわ・ゆうきフリーライター『SPA』に「ブレイク・ワイフ」連載中）

特集 売春は悪いのか？

# セックスワーカーを「貶めな い」性教育を 鈴木水南子

はじめまして。私の名前は鈴木水南子といいます。

一〇代の終わりから二〇代の半ばまで、売春をはじめとする種類の性産業に従事した経験を持つ元セックスワーカーです。途中、性産業で稼いだお金で予備校に通い、念願の大学生になりました。大学生活も終わりを迎える二〇代後半の現在は、「セックスワークをしない」という選択をしています。

私がこれからみなさんにお話ししたいことは二つあります。一つは「売春Ⅱ人格崩壊」説についてで、これが今回の文章の中でみなさんに一番伝えたいことです。二つ目には、今私を取り組んでいる現役・元セックスワー

カーのためのピア・カウンセリングの紹介を少しだけしたいと思います。

「売春Ⅱ人格崩壊」と言うことの意味

私は、ある性教育の現場で「売春をすると人格崩壊します」といったことが言われているのを聞いたことがあります。その言葉を聞いて私は深く傷つきました。なぜなら「売春をしていたあなたは、実は人格が崩壊してしまっています」と宣告されたように感じられたからです。その言葉を聞いた途端に私の心臓はドキドキし始め、

胃がぎゅっと縮み上がったままになりました。(確かに、仕事の現場ではとんでもないものを見ることもあったし、いろんな経験をしたけれど……そのせいで私は「人格崩壊」してしまったのだろうか。私はもうダメなのだろうか) こんな思いが、振り切っても振り切っても湧き上がって来ました。同時に、「人格崩壊」していかない他の人たちと席を並べてその場に居続けることが「罪」のように思え、いつ席を立つべきか講義の間ずっと悩み続けました。そしてその後は信頼できる人たちにこの話を打ち明け、「人格崩壊だなんてあんまりだ」と言いながら声を上げて泣き続けたのです。それだけ私は「人格崩壊」という言葉に深く傷つきました。

私はある本の中でも、売春が「人間破壊」「自己破壊」と書かれているのを見ました。もちろん、私はその言葉がある意味では間違っていないことや、そのような言葉を使わざるをえないという気持ちもよくわかってはいるつもりです。なにしろ私はその現場にいたのですから。しかし、これらは事実には反する言葉です。なぜなら人格や人間、自己は崩壊することはないからです。肉体に負う不可逆的な障害や、命を失うことならば肉体の「崩壊」「破壊」と言うことはできるかもしれませぬ。しかし心

の問題に対してはこれらの言葉は当てはまりませぬ。心は、どんなに深く傷つけられたとしても(崩壊したように見えたとしても)、その人が生き続ける限り崩れ去ってなくなることはありません。そして効果的な助けさえ得ることができれば再生する機会もあるのです。そもそも、この世で懸命に生きている人間に対して、その人の人格を「崩壊」などと形容することはひどく無礼なことではないでしょうか。

「しかし性産業では本当に女性は酷い目に遭っているではないか。それを過小評価するわけにはいかない」とお考えになる方もいるでしょう。しかし当事者に「人格崩壊」という言葉を与えなければ、その当事者の体験や、その人が傷つけられたことに対する深い同情や憤りを表現できないのでしょうか。傷を負った張本人である当事者に対して「人格崩壊」などという言葉を与えることは、その傷口に塩を擦り込むようなものではないでしょうか。よく考えてみてください。「あなたは人格崩壊している」なんてことを他人に対して言えますか。たとえば「営業職につくと人格が崩壊する」と公言することができますか。それを聞いた営業職の人は傷つき怒り出すにちがいありません。普通にはとても言えない言葉でも、

売春をした人に対してなら言ってもいいのでしょうか。性産業という「認めがたい」職業に従事した人間にも人権はあるのです。嫌悪する職業に就いている人間だからといって、その人の人権が奪われるようなことがあつてはなりません。

また、この「人格崩壊」という言葉は容易に「レッテル」へと転化します。特に、専門家や教育家などの「発言力がある人」が使えばなおさらです。これをお読みになっている皆さんの中にも、生徒に対して「売春をする」と人格崩壊します」と伝えた教師の方がいらっしやるかもしれません。しかし生徒の中には、すでに売春をしたことがある人もいるかもしれません。その生徒は、先生から「あなたは人格崩壊している」と言われたことになります。私のように「あんまりだ！」と後で泣き叫ぶことができればまだしも、おそらく、その自分に対するネガティブなメッセージを否定せずに、黙って感情を麻痺させてやり過ごしたかもしれません。いずれにしろその生徒を傷つけたことは間違いないでしょう。また、売春をしたことのない生徒には「売春をした人＝人格崩壊者」というレッテルを伝えたことになるでしょう。そしてセックスワーカーに対しては「人格崩壊」をはじめとする

どんなに酷い言葉を投げかけてもいいのだ、という許可を与えたことになるでしょう。これは、セックスワーカーに対する差別や偏見を育て（これは性差別にもつながっていることを知ってください）、その後ますますセックスワーカーを「人格崩壊」へと追いやることになり

ます。

思うに、「人格崩壊」と発言せざるを得なかった人たちは、セックスワークの中で傷つき酷い目にあつた女性たちを知って、ひどく傷ついたのでしょうか。その人は「彼女たちの話を聞いて私はひどく傷ついた。とっても悲しかった。つらかった」と伝えればよかったのです。そして「私は女性たちを守りたい。女性のうちの一人だつて酷い目には遭わせたくない。私は断固女性を守ることを決断したよ」と正直に言えばよかったのです。主語を「私は」として、自分の気持ちを話せばよかったのです。

先生も、生徒に対して「売春をすると人格崩壊します」と脅すより、「あなたは本当に大切な人だよ。今私にお金があつたら一〇〇兆円でもあげたいくらい大事な人なんだからね」と本当の気持ちを伝えてくれた方がどんなに通じることだろうかと思えます。当時の私を思い出す

と、「行かないで。あなたは本当に大切な人なんだからね」と伝えてくれる大人がいてくれたら、こんなメッセージを決して諦めないで伝え続けてくれる大人がいたら、セックスワークを選択することはなかったかも知れません。

どうかセックスワーカーに対して「人格崩壊」をはじめとするネガティブなレッテルを与えることはやめてください。たとえば「売春をすることはプライドを売ることだ」と伝えることもやめてください。この世に「プライドを売った」ことのあるセックスワーカーは一人もいません。どうやったらプライドを売ることができるのでしょうか。それは第三者による勝手な解釈です。この解釈は「自らプライドまで売ったのだから何をされても仕方がない」という考えへとつながり、セックスワーカーに対する抑圧、差別、虐待を助長することになります。

それに、どんなにセックスワーカーにネガティブなレッテルを与えたとしても、それによって性産業が消滅するわけではないのです。それは逆に、現状のままの性産業を維持したい社会や人々に貢献することになるでしょう。「それでは子どもたちに性産業についてどうやって伝えたいのか」とお思いになるでしょうが、これが

らは、人間（セックスワーカーも人間です）を傷つけることなく、貶めることなく、正確な情報と一番大切なメッセージを伝えて行く方法を模索していかなくてはならないのではないのでしょうか。この一番大切なメッセージを伝えて行く方法については、誌面の都合からまたの機会に改めてお話ししたいと思います。とにかく「セックスワーカーも私たちと同じくらい、大切な、重要な人間である」——この認識を原点にして始めませんか。セックスワーカーと言えども、誇りを持って生きる一人の人間なのです。その職業が道徳的に認められるかどうかはともかく、認めてよいものかなのかどうかはともかく、これ以上セックスワーカーの（つまり人間の）人権をないがしろにし続けることは止めなければなりません。

## 現役・元セックスワーカーのための

### ピア・カウンセリング

話はガラリと変わりますが、「人格崩壊」発言を聞いて以来、私は当事者同士の自助グループを作りたいと思うようになりました。なぜなら「人格崩壊」などと

言う専門家にはとても頼れないと思ったからです。「人格崩壊」などとネガティブなイメージで私を見ないで、そのまんまの私を受け入れてくれる人たち、そして私の過去のセックスワークの経験に祝福(祝福と奨励はまったく別です)すら与えることのできる人たちが必要でした。そして今、私の夢が実現しようとしています。日本で初めての試みだと思えますが、現役・元セックスワーカーが互いをカウンセリングし合うという素敵な方法「セックスワーカーのためのピア・カウンセリング」に取り組み始めたのです。

このカウンセリングは、アメリカのハーヴェイ・ジェイキンズによる「コウ・カウンセリング」を参考にしながら進められています。カウンセリングのやり方をごく簡単に言うと、「時間を対等に分け合って、クライエント役とカウンセラ役を交替しておこなう」「泣く、笑う、怒る、震える、汗をかくなどといった、身体を通じた感情の解放を尊重し、促す」というものです。ピアとは「仲間」という意味ですが、ピア・カウンセリングで用いるときには「同じ背景や体験を持つ人たち」のことを意味し、ここではセックスワークの経験を持つ人のことをピアとよんでいるわけです。それでは、以下にピア・

カウンセリングのすばらしいところをいくつか述べていこうと思います。

### セックスワーカーについての

#### エキスパートが話を聞いてくれる

ここでは、当事者である現役・元セックスワーカーが「その問題のプロである」という認識をもって話を聞いてくれます。セックスワーカー同士だという安心感や快さの中では、困っていること、苦しんでいることなどを気軽に話すことができます。

#### 孤立にさよならできる

この社会には、セックスワーカーを責め立てる情報が蔓延し、セックスワークの経験があることが知られたらひどい攻撃を受けます(「人格崩壊」発言もその一つです)。したがってセックスワーカーは仕事について友人、家族などに話すことができず、孤立しがちです。しかしピア・カウンセリングの場ではそのパターンは打ち破られ、セックスワーカーが連帯して問題を共有することができます。

どんな経験があっても責められることはない

私たちに必要なのはレットテルでもお説教でもなく、どこまでも自分を肯定し、信頼してくれる暖かい言葉や抱擁、眼差しです。その暖かさの中では、本来の自分の知性が働きだし、理性的な自己決定、自己選択が力強くできるようになります。

今後は、このピア・カウンセリングをもっと多くのピアに伝えて行き、必要な時にいつでも自由にカウンセリングし合えるサポート・ネットワークを作っていきたいです。また、カウンセリングを積み重ねる中で「現役／元セックスワーカーが陥りやすい心理的パターン」など、セックスワークの経験者のサポートに必要なことを文章化してまとめていくつもりです。これはカウンセリングの場で自分たちの経験を再評価する際に役立てますが、社会に向けてもシェアしていきたいと考えています。

さらに、セックスワーカーをサポートしたいと本気で考えてくれる「サポーター」も育てて行きたいと思っています。つまり、現役・元セックスワーカーの話を尊重して聞くことができ、力になってくれる人を増やしていきたいのです。なぜならセックスワークの問題はセック

スワーカーだけの問題ではなく、この社会に生きる人間すべてにかかわってくる問題だからです。そういうわけで、これを読んでくれたみなさんとも、いつか何らかの形で素敵な出会いができることを期待しています。

## カンパのお願い

関西方面へピア・カウンセリングを伝えに行きたいのですが、そのための交通費が足りません。どんな金額でもありがたいです。どうかよろしくお願いします。

郵便振替口座 10080-69955141  
(郵便局総合口座) 名称「SWEの会」

※この口座はSWEの会のご厚意により共有させていただいているものですので、通信欄には必ず「ピア・カンパ」と書いてください。

※なお、「SWEの会」やその代表者と「ピア・カン」とは別のグループです。

※お問い合わせはフェミックスまでお願いします。

## 社会現象としての「援助交

## 際」を考える 川畑智子

はじめに

近年マスメディア上において「援助交際」に関する議論が加熱したかと思えば、もう今は下火になってしまっている。一九九三年夏頃から一九九四年にかけて、マスメディア上で、女子高校生がブルセラショップでパンツや制服を売ったり、伝言ダイヤル、ポケットベル、テレクラ、デートクラブを利用して小遣い稼ぎをしているという「実態」が飽きるほど報道された。テレビ上では、多数の女子高校生が制服姿で上半身にボカシの入った映

像で写し出され、「危ない女子高生」というイメージが固定化された。そして、大人たちの間で「援助交際」という言葉が、あたかも女子高校生による売春の代名詞であるかのように使用されている。しかし、「援助交際」は、お金を援助してもらおう目的で交際するという意味で、この言葉には、一緒に食事に行くだけ、遊びにつきあうだけということも含むため、必ずしも売春と同義ではない。また、「援助交際」を行っている人々の層は、女子高校生に限らず、女子中学生、無職少女・女子短大・大学生、女子会社員、主婦もいる。そして、テレクラやデートクラブで働いている少女たちのうち「売り」（売



春)までしている子はごくわずかであると言われている。

しかし、大人たちがメディアに翻弄されている間に警察の監視は厳しくなり、ブルセラシヨップやデートクラブで働く女子高校生が次々と補導されていった。そして、今年四月三日には東京都青少年問題協議会が、一九八八年の答申で見送った買春処罰と、新たにテレクラ規制導入を求める答申を都の定例議会に提出し、今年九月にはテレクラ営業規制条例と淫行条例(買春者処罰)を導入するために条例改正案が都の定例都議会に提出される見通しとなっている。これであたかも問題は解決したかのように、「援助交際」に対する関心は薄くなってきた。

本稿では、淫行条例の導入に反対の立場から社会現象としての「援助交際」を検討していくことにする。

### 何のために買春処罰規定を導入するのか？

「法と民主主義」(日本民主法律家協会／一九九六・一〇)によれば、買春者処罰を求めて東京都に陳述・請願をした人々の内訳は、主に個人、PTA、青少年対策委員会、自治会・町内会、母の会、防犯協会だった。

四月五日に行われた性の権利フォーラム主催の「買春処罰で高校生売春をなくせるか」という集会には東京都青少年問題協議会の委員(三六人<sup>プラス</sup>、都知事)のうち三人が参加していた。しかし、彼等の話によれば、もともと買春処罰規定の導入に最も積極的だったのは警察であり、買春処罰規定を設けようという声は警察以外に上がらなかったという。

今年六月三日には、警察庁長官が、一四歳から一九歳の少年人口の非行に対してこれまでの「保護」中心から「検挙」中心に転換するという宣言をした。また、買春者処罰規定がある大阪府では、大阪府警が今年一月から「援助交際」をする女子高校生にも売春防止法を適用する方針を打ち出している。そして、四月には「援助交際は売春です」というポスターの学校での掲示をめぐる大阪府教育委員会と議論になっている。

平成四年(一九九二年)の「犯罪白書」(法務省法務総合研究所)では、すでに「女子と犯罪」という特集が組まれ、特に女子の覚醒剤取締法違反は、成人・少年を問わず、暴力組織との関係や性犯罪に関連するものが目立つという報告がされている。警察庁では、平成五年(一九九三年)の「警察白書」で、暴力団問題について特集を組

んでいる。その中で、青少年の暴力団への加入を防止し、暴力団の人的基盤を切り崩すことを目的とすることが書かれている。こうしていつの間にか、マスメディアや警察によって、「援助交際＝売春＝性犯罪」という構図と「援助交際＋「おやじ狩り」(強盗)＋薬物使用＝非行」という構図が地域で定着してしまい、規制の対象がいつのまにか買春者から青少年へ変化してきている。

買春処罰規定を導入することの裏には、買春をする大人を規制するというよりもむしろ、売る側(子ども)を規制するには、まず買う側(大人)を処罰しなければならぬといった本末転倒な論理が存在しているようだ。これを、子どもの覚醒剤への関与ひいては暴力団との関わりを防止する目的、あるいは子どもの権利を守る目的であるとみなすのは、あまりにも短絡的すぎる。むしろ、暴力団そのものを規制するよりも暴力団予備軍の子どもたちを規制する方がまだ簡単であるという考え方があるように思える。

買春処罰規定導入によって、子どもは大人社会によって管理され、「不良」とみなされれば処罰され、排除されるのである。女子高校生と言えども単なるお小遣い稼ぎの目的や好奇心から売春すればただの売春婦なのだか

ら、現行の売春防止法によって、大人同様に規制するべきなのだということが、これまでの警察の動きから判断できる。結局のところ、買春者処罰規定の導入は、警察の思惑どおりにルールが敷かれていることを示している。

### 買春処罰規定の導入によって

#### 子どもの権利は守られるのか？

私は、このような急激な展開に強い懸念を感じている。一九五六年に売春防止法が制定される直前、仕事もなく、手に職もなく、売春を続けなければ生活できない女性たちは、犯罪者というレッテルを貼られ、弱者の立場を利用して、暴力組織に組み込まれていくことへの恐怖を訴えた。しかし、その願いは全く聞き入れられず、売春防止法施行(一九五八)後、女性たちはアンダーグラウンドでの生活を余儀なくされ、一旦足を踏み入れたらもう元の生活に戻ることができなくなり、女人化が進んだのである。確かに、当時置かれていた女性の立場と今日の女子高校生が置かれている立場は違うかもしれない。しかし、それは問題ではない。「援助交際」＝売春

Ⅱ 性犯罪として取り締まると、「援助交際」をしている全ての女性に対して犯罪者というレッテルを貼ることに  
なり、女性たちは弱者の立場に置かれ、人目につかない  
危険な場所で「売り」をして暴力組織に見つかれば、弱  
みにつけこまれて暴力組織に管理されてしまう危険性が  
高くなるのである。

また、女子の覚醒剤（薬物の売買は、暴力組織の重要  
な資金源となっている）の使用は近年増加傾向にあると  
はいえ、覚醒剤取り締まりのために「援助交際」の取り  
締まりをするというのであれば、これも本末転倒な話で  
ある。警察と暴力組織のイタチごっこに、少女たちを巻  
き込むだけではないのか。また、近年の男子中・高校生  
による凶悪事件や「おやし狩り」（強盗）に対する世間  
一般の懸念の波に便乗して、警察は「援助交際」をする  
女子高校生も「非行少年」の例外ではないと捉えている  
（「援助交際」をする少女たちが皆「おやし狩り」をしてい  
るわけではない）。

結局のところ、買春処罰規定導入は、法によって子ど  
もの行動を抑制し、管理するといった大人の論理が露呈  
されたことを意味しているのではないか。要するに、買  
春処罰規定導入は、少女たちを売春防止法で取り締まる

ためのお膳立てだったのではなからうか。

世界各国を見ても、警察に検挙されるのは客よりも圧  
倒的に街娼の方が多い。売春防止法で相手方となること  
も禁止されている（処罰の対象とはなっていない）日本  
でも客が検挙されたことはほとんどない。逆に買春処罰  
規定の導入によって客の買春行動は悪い方に変化する危  
険性がある。例えば、アメリカの街娼の研究では、客の  
処罰化によって、客が警戒心を強めると、人目につか  
ないように、車で街娼に接近してくるということが示され  
ている。しかし、その結果、警察に客との交渉が見破ら  
れないように、暴力的な客かどうかの判断を瞬時に行  
われなければならず、判断を誤って暴力的な男の車に乗  
ってしまったら逃げるができぬ。また、密室で会  
うことになれば、これもまた瞬時の判断がせまられる。  
安全な客は、危険な女子高校生を求めるよりも普通の風  
俗店に行った方が安心となり、女子高校生が暴力的な客  
にあたる確率が高くなることも予想される。

この他、制服を着た女子高校生と背広を着たサラリー  
マンが通りを一緒に歩いていたら、たとえ親子でも、警  
察官によって怪しいと思われれば、職務質問を受けるこ  
とにもなる。実際、イギリスの街娼の研究では、女性が

待ち合わせをして立っていただけで、「立ちんぼ」をしていると疑いをかけられた問題で、警察官の裁量権の範囲がどこまで許されるべきかが議論となった。

以上のように、買春処罰規定の導入は、子どもにとって悪影響をもたらすばかりでなく、警察の市民生活への介入をもたらし、プライバシーが守れなくなる危険性をもはらんでいるのである。

### 何が問題なのか？

「援助交際」に対する警察の行動は、一見したところ、買春処罰規定を導入することによって、子どもの権利を守ろうとしているかのように思われるかもしれない。しかし、その裏には、子どもを処罰するためには、まず大人を処罰しなければならぬという考えが存在している。買春処罰規定を導入することで、逆に子どもは、行動を管理され、大人の論理を押し付けられ、権利を侵害されることになるのである。

私は、このような「援助交際」をとりまく大人の行動を、一つの社会現象として捉えるべきだと思う。そして大人が自分の問題としてこの社会現象を冷静に見つめる

べき時がきていると思う。

買う大人と売る子どもの間に働く権力関係のみを見て短絡的に子どもは社会の「犠牲者」、大人は「加害者」という二項対立図式で捉えるのは誤りである。なぜならば、そのような捉え方を続ければ、子どもを、主体性のない、判断能力に欠けた人間と看做し、子どもを「教育」「保護」することによって逆に大人の子どもの性に対する管理欲を増大させるだけだからである。子どもを「教育」するにせよ、「保護」するにせよ、学校や警察に子どもの性を画一的に管理させれば、必ずどこかで逸脱した性行動を行う子どもは排除の対象とされるだけである。そして、このままいけば、人間の性は、細部にわたって管理されていくのかもしれない。大人もまた、その被害者であり、そのことを顧みずに、問題があなたかも解決されたと安心するのはまだ早い。臭いものには蓋をして、見て見ぬふりをすることは、同時にそのツケを次世代の子どもにまわすことを意味する。

もともと大人も子どもであり、人はいつから大人になるかは誰にもわからない。二〇歳になったら「成人」という法的権利義務を負う法的人格が事実上存在するにすぎない。結局のところ、大人とは、「成人」として社会

に統制・管理されている子どもということになる。

学校や警察に頼る前に、今大人がしなければならぬことは、自己の性に真剣に向き合うことである。「援助交際」の原因を資本主義や女性の社会進出や都市社会に求めるのもうやめて、自分の問題としてとらえることである。「援助交際」現象にみられる大人たちの言い逃れが、結局社会的弱者である子どもの性に対する管理を一層厳しくするという形になってあらわれたのである。

「援助交際」現象の最も重要な問題とは、「援助交際」がこれまで自己の性に向き合えなかつた世代の「大人」たちに、自己の性と向き合う機会を与えてくれたのに、その作業を拒んでいることなのである。自己の性に向き合う機会を逸した世代と自己の性に積極的に向き合おうとする世代が、たまたま「援助交際」という機会を通じて出会ったと考えれば、自然である。つまり、今大人に必要とされていることは、子どもたちに目を向けるのではなく、まず自分も含めた、現在「大人」と呼ばれている世代の子どもが自分たちの性に積極的に向き合うことなのである。

大人たちが、この機会を無視し、言い逃れによって隠蔽し続けければ、再び同じことの繰り返しが起こるだけで

ある。子どもたちの性が社会によって細部にわたり管理されていくことになれば、次世代の子どもたちは窮屈な性規範の中でもがき続けるだけである。たとえ「援助交際」という風穴が塞がれても、再びどこかに風穴があくに違いない。子どもにとってその風穴は、たとえリスクが大きくても自己の存在を確認できる唯一の場となっているのかもしれない。

### 自分の問題として「援助交際」を考える

最後に、フェミニズムの視点から、私の問題として「援助交際」現象をとらえるならば、私にとって一体何が問題であるのかということを示したい。

私は子どもの頃、セックスに対する好奇心が旺盛であり、時々自分が「変態」なのではないか悩むぐらいだった。しかし、一方で、自分の性器を見たり、触ったりすることもできず、自分の太股の間は闇で包まれているという感覚がいつもあった。そして、セックスに関する言葉や表現方法も知らず、また、セックスに関する情報紙があるのか否かもわからず、また、誰に聞いたらよいかも、聞く方法もわからなかった。結局、セックスについ

てよく知っている年上の男性から（同世代の男性からは期待できない）、自分のからだの喜びや、避妊、性病予防に関する知識を得るしか方法はなかった。そのような意味において、性体験の多い世代の人間と性的関係をもつことは、たとえリスクはあっても私にとって大変意味のある行動だった。もしも、私が「援助交際」をしていたとすれば、理由は、恋愛とは全く関係なく、多様な異性の存在を知るといふ社会勉強であり、自己にとって異性とは、セックスとは一体何を意味するのかということを知るためだったであろうと思う。一言で「好奇心」からといえばそれだけだが、その言葉にはそのような意味があったであろうと思う。そして、お金は、きつと疑似恋愛と本当の恋愛の境界線を作るためだったであろうと思う。

私は、「私にとって性とは一体何なのか」という問いを、私に代わって現代の女子高校生が社会に向けて発信してくれたのではないかととらえている。ゆえに私にとってこの「援助交際」現象の何が最も重要な問題かといえば、それは、若い女性の訴えが社会によって隠蔽されようとしていることなのである。メディアは、若い女性たちの声を歪め、警察は世間の若者の凶悪な行動に対す

る懸念に便乗して若い女性たちの行動も一緒に規制しようとしている。女子高校生の本当の声は、一方で、「犠牲者」の声に勝手に作り変えられ、他方で「犯罪者」の声に勝手に作り変えられて、かき消されてしまうのである。私は、「援助交際」そのものや、「援助交際」をする人々を問題化するのではなく、社会現象としての「援助交際」を問題化し、女性の性的自由及び自己決定権の侵害の問題として、これをフェミニズムの視点から考えていく必要があると思う。

誤解のないように言うておくが、私が買春処罰規定導入に反対する理由は、女性の性に対する管理を強化する結果を招く危険性が高いからである。ゆえに、この「援助交際」現象は、「女性とセクシュアリティ」というテーマでじっくりと議論すべきだと思う。

そして、大人が「援助交際」を自分の性の問題として考えない限り、本当の議論は始まらないだろう。

（かわばた・ともこ 東京都立大学大学院博士課程社会科学専攻 社会学専攻。主論文に「性的奴隷制からの解放を求めて」江原由美子編『性の商品化―フェミニズムの主張2―』勁草書房、一九九五年。）

# 「日本の」 フェミニズムを つくるために

堀田 碧



この原稿を、「多様なフェミニズム」についての三回シリーズとして書いています（第一回五月号、第二回六月号）。で、今回はそのしめくくり。「日本の」フェミニズムについて、書きたいと思う。

というのは、自分自身の「女であること」を知りたくて、それでもなんだか、どうも日本でのフェミニズムにしっくりこなくて、ええい、という感じで「本場」のフェミニズムを勉強に行った私が、イギリスで黒人フェミニズムに出会い、「フェミニズムはひとつではない」「フェミニズムは欧米の思想ではない」と思ったとき（この

へんのことは、五月号に書いたので、よかったら読んでください）、初めて、ハッとするほど新鮮な思いで、「日本の」フェミニズムと向き合うことになったから。言いかければ、「西洋」「白人」フェミニズムを「フェミニズム」と思い込んできた自分自身の「内なるヨーロッパ中心主義」に気づいて初めて、西洋コンプレックスの裏返しのような窮屈で後向きな「日本主義」とは違う、のびやかな「日本の」フェミニズムがあるはずだ、と思えたから。

というわけで、私にとっては、「多様なフェミニズム」の中で初めて、しがらみやこだわりなしに、「日本」や

「日本の」フェミニズムと向かい合えたのだった。

### 初めて人種差別される

イギリスに暮らして初めて、「日本はアジアの『果て』の国」と知った。

「極東」「ファアースト」という呼び名を、日本にいるときには、別に深く考えたこともなかったのが、イギリスに来ると、それは、なんのことはない、「イギリスから見た距離」だった。植民地帝国であったイギリスにとって、「イースト／東」とはまずインドのことで、より近い「イースト」が「ミドルイースト／中東」、より遠い「イースト」が「ファアースト／極東」だった。そして、「極東」である中国のもっと果てにあるのが——あるいは、なんだか中国のあたりにあるらしい、というくらい感覚が——日本というわけなのだった。

そうか……そういうことだったのか、と、初めて「遠い」日本を見やった。

そんなイギリスで、初めて「人種差別される」体験もした。

最初は、「視線」を感じても「気のせいかな」と思っ

ていた。そのうち、バスに乗ると私の隣がいつも空いたままなのに気づいた。八百屋のおばさんが、私にだけ「サンキュー」と言わないことも気になった。そんな話をする、ある日本人の留学生は「私、道を歩いてて、子供に石を投げられたわ」と言い、ほかの日本人は、スーパーで万引きに間違われたと言った。

イギリスという、白人を多数派とした西洋社会で、私はまず「イーストの人間」、まあ言ってみれば、「なかなかよくわからない、うさんくさい東洋人」なのだった。

そんなことを言うと、「そんなの、気にしすぎよ」「私はそんな思い、したことないけど」という日本人がいる。私の「反イギリス感情に憂慮」を示す人も。でも、心配ご無用、私は、イギリスに好きどころがたくさんあるし、本当によいイギリス人の友人も得たけれど、そのことと、「人種差別された体験」とはぜんぜん矛盾しない。

だから、道義的非難としてではなく事実の問題としていうけれども、日本人は、欧米で、非白人、東洋人、有色人種として、人種差別の対象なのだ。

実は、こんなことは、ことさら言うまでもない、「ごく一般的な社会常識」の部類なのだ、もちろん、困ったことではあるけれども。それを、どうして私自身、イギリ



スで暮らすまで気づかなかったか、あるいは、現に欧米で暮らしていても気づかない日本人がいるか、というところの意味で、日本人が欧米で「人種差別された」と感じるためには、けっこう敏感なセンサーを必要とするからなのだ。

今どき、露骨で公然たる人種差別、というのはいむしろ少数派だし、学者や留学生としてアカデミックな世界に暮らせば、「日本人だから」と差別されるよりは優遇されることのほうが多かつたりするくらい。お金をもっていて、しかも「良識ある」中産階級であれば、その人自身が露骨な差別に会うことは、多分あまりない。あるのは、「これって差別なのかな？」と迷うものや、「あの人の体験」——だいたいにおいて「あの人にも問題があったんじゃないの？」で片づけられる——で、だから、センサーの感度が悪いと、感じられない。

それに、一般的に言って、「日本に暮らす、日本民族である、日本人」は人種／民族差別に鈍感だ。それは、過去に植民地支配を受けたことがなく、海外に移民した人も少なく、人種や民族があまり多様でない、わりと閉じられた社会に、民族的多数派として暮らしてきたこととも関係しているだろうし、また、「差別反対」とか

「人権」といったことが社会の大勢になるような大がかりな政治的体験（たとえば欧米での七〇年代のように）を経ているいせいでもあるのだろうか。

そして、もうひとつ、差別のセンサーを鈍くしているものに、日本人の頭にこびりついた、いわゆる「脱亜入欧」の意識がある。

これは、根強い意識だ。そして、なかなかやっかいなものだ。それが、一筋縄ではないかたちで、「人種差別に反対」の私自身をもがんにがらめにしていったことを、私は思い知ることになった。

### 「脱亜」という意識

それに気づいたのは、イギリスで『タイ女性の売春とエイズ』のテレビ番組を見たときだった。

それは、タイの売春婦、それも貧しい農村から連れて来られた、まだ少女といった年ごろの若い女性たちが、売春婦にされ、HIVに感染しているという問題を「告発」したBBCのドキュメンタリー番組で、少女たちは、貧乏ゆえに、あるいは無知で従順なために、暴力組織の餌食になっても逃げだすこともできずに、心もからだも

傷ついていた。

私は、もちろん、すごく腹が立った。

画面では、タイの少女たちが、客に指名されるために、台のうえでディスコ・ダンスを踊っていた。見ているうち、ドキッとした。遠い距離をおいたイギリスから見ると、長い黒い髪の毛、細いからだの女の子たちは、日本の女の子そのものだった。それは「アジアの女」なのだった。

そして、気づいた。私の腹立ちが、「こんなひどいこと」に向いているだけではなくて、「アジアの女」をこなふうにしか描かない、「欧米の番組製作者」にも向けられていることに。だって、出てくるタイの女性はみんな無知で無力で、タイにもいるはずの、こうした現実と闘っている女性たちは映されたいし、出てきた救済組織の人は、男性牧師と、そして白人の女性だった。つまり、その番組には——それが「良心的」な意図から作られたことを、私は認めるけれども——無意識のうちに、「遅れたアジア」「無知で従順なアジア女性」といった、ステレオタイプな差別意識が内在化されていることを、イギリスにいて、自分もまた黒い髪の毛の「アジアの女」として差別を受けた私は、はっきり感じたのだ。

ところが、しばらくして、私はまたまたハッとした。

日本で、これと同じようなタイの売春問題を「告発」した番組を見たことがあったのを思い出したのだった。

それはたしかNHKのドキュメンタリー番組で、そこには、BBCの番組と同じく「かわいそうなタイ女性」が出てきたけれども、そのとき、わたしはその女性たちを決して「私と同じアジアの女」とは感じなかったのだ。

私は考え込んでしまった。そして、思いあたったのはそれまでそんなふう考えたことはなかったのに——私自身が抱え込んでいた「脱亜入欧」意識の根強さだった。そのころ、日本にいたとき、私は「アジア」に対して、いつもいくばくかの「罪悪感」を感じていた。「日本は差別する側」と思い、「日本人の差別意識」を反省しているつもりだった。でも、そうした気持ちの中に、自分を「アジアの女」から切り離し、「日本人」を「アジア人」とは違った存在とする意識が温存されてはいなかったか。そのとき、「私は日本人」であり「先進国の人間」だけれども「あの人たち」は「遅れたアジアの人間」であり、「タイの売春婦問題」は「遅れたアジアの問題」であると、無意識のうちに、思っていたのではないか。そしてそれは、「日本人は差別する側」という形をとった、「脱亜」の意識にはかならなかったのではないか。

「日本とアジア」という。でも、日本はアジアなのだから、本当なら「日本と他のアジア」と言うべきなのだ。でも、大方の日本人は、「アジア」と言うときに、当然のように、「日本」を含めていない。そして、ことさらに「日本はアジアだ」と主張されるときには、それはなんだか、とてもきな臭い。で、「いや、そんなこと言うけど、日本はアジアを差別してるじゃない」と言うけど、今度は、根強い「脱亜」の意識にからめとられてゆく、という実に困った構造になっているのだ。

それはまた、「入欧」の意識でもある。

明治以来ずっと「西洋」の方ばかり見てきたあげくに、この間の「経済大国」意識が加わって、今や日本人は心理的に「西洋人」「白人」化している。ここに、今では当の西洋で音を立てて崩れつつある「普遍的西洋近代」神話と、目の前の日本の現実への苛立ちが主要な動機となっている「遅れた日本、先進的な欧米」信仰がないまぜになって、心理的な「白人」化を更に加速しているように見える。

「アジア人」「有色人種」である日本人が心理的に「白人」化しようとすれば、自分を「アジア人」から切り離そうとする意識は、当然強まる。これは、正直いって、

日本の「リベラル」で「良心的」といわれる人たちにもあてはまる。こうした「脱亜入欧」意識と心理的「白人」化が、「日本人は差別する側」とだけ言って「有色人種」として差別される日本人」を見ようとしないうちに表れていると、私は思う。

こう言うと、かならず、反論が起きる。

「日本人が受けている差別など、たいしたものではない」「日本人が差別してきたことを曖昧にするのか」等々。そして、困ったことには、そういうことを言う人たちはたいがい、真面目で正義感にあふれ、日本の現実を変えようががんばっている人たちだったりするのだ。

でも、ちよつと待つて。

白でなければ黒で、したがって、黒でなければ白だ、といった単純粗雑型、二項対立型の問題の立て方は、そろそろ終わりにしたい——「冷戦」も終わったことだし。そして、もっと複雑な、構造的な、相互関係的なものとして、いろんな問題を考える必要があるんじゃないだろうか。「白か黒か」的思考をやめたからといって、今度は一切の「判断」を放棄してしまうような「別の単純粗雑型」に走るのではなく、肩の力を抜いて、あつちから見たりこつちから見たりしながら、繊細にかつ粘り

強く、熱っぽくかつ冷静に、考えること、そうして、「異見」や「多様性」を認め合うこと——それしかないんじゃないか。まあ、ひどく大変だけれど。

というわけで、話を元に戻すと、「黒か白か」的発想をやめれば、「日本人は有色人種として差別を受けている」ということと「日本人は他のアジア人を差別している」ということは、矛盾しない。それどころか、白人を一番「上」におく「人種差別主義というシステム」——それは単なる「意識」の問題ではない——の中で、言ってみれば「中間」にいる日本人が、「上」に媚び、心理的に「白人」化して、「他のアジア人」を差別するのは、むしろ理にかなったことでさえある。それは恥ずかしい、そしてやりきれないほど哀しいことであるにしても。

女性学の中で、一冊の本を読んだ。

それは、二〇世紀初めのアジア各国での女性運動についてアジアのフェミニスト研究者が書いた、『第三世界のフェミニズムとナシヨナリズム』という——とてもよい！本だった。そして、その「第三世界」の中に、「日本」という項目もあった。

私の中で、なにかがふっ切れた気がした。日本は、アジアで、第三世界（の出身）なんだ。それがどうした？

なんだか、すてきな気分だった。「日本」というものを、初めてこढ़わりなしに、受け止められそうな気がした。

### イギリスから日本へ帰って

イギリスで暮らし、黒人フェミニズムに出会うことを通して、私は自分自身の「人種差別主義」や「ヨーロッパ中心主義」を思い知ることになった。「リベラル」「進歩的」という体裁をとった「脱亜」意識や心理的「白人」化の根深さにも、気づいた。そして、そうしたものがどんなに、「非白人」「非西洋人」であり「アジア人」である私を、がんじがらめにしていたかも知った。

その時、私の中で、「フェミニズム」が肩の力を抜いたように、「日本」もあるがままの姿を表わしたようだった。それは、「限りなくだめな日本」でもなければ「一番美しい日本」でもない、「そこにある」日本だった。「そこにある」イギリス、「そこにある」インド、「そこにある」アメリカ、「そこにある」韓国……それと同じように、「日本」と呼ばれる国／地域／社会がある。

「日本の」フェミニズムは、そこに生きる女性たちから発したものだ。「特殊」でも「遅れた」ものでもない、

「そこにある」フェミニズム。

もし日本のフェミニズムが「遅れて」いるとすれば、それを「遅れた」ものにしてるのは、「白人」「西洋」フェミニズムでしかないものを普遍的な「フェミニズム」と思いこむ考え方だろう。でも、「男性」中心の社会のあり方や思想を一般的普遍的な「あり方」や「思想」と思い込むことを、ラディカルに批判してきたフェミニズムであれば、今度は、「西洋」中心のあり方や思想を普遍的であると思いつくことの問題にも、気づくのではないか。そういうものとしての「日本の」フェミニズムを作る作業に加わりたいと、私は心から思った。日本へ帰ろう――。

――と、ここで終わりになればまるでハッピーエンドなのだけれど、残念ながら、そうはいかなかった。

私の「目」が変わったせいもあるのだろうけれど、帰ってみると、日本人の心理的「白人」化――それを私は「エセ白人主義」と命名しました――は、ものすごい勢いで進んでいて、生活水準が向上した分、なんだか日本中がいつそう「白人」「西洋」を基準としたあり方から分を当てはめようとする――イングリッシュ・ガーデンから規制緩和まで！――もがいている。奇妙なことには、今

や「脱西洋」「東洋化」がちよっとしたトレンドになっている、そういった「西洋」を、「非西洋」であり「東洋」である日本人が真似しているという、なんだかすさまじくややこしいことにさえなっている。そして、そうした傾向に呼応するように、「伝統的日本人」や「日本主義」もまた、新しく強まってきているようだ。

なんだかまるで日本の「宿命」ですらあるかのように見える、この「西洋崇拜」対「日本主義」の二項対立は、伝統的にいって「進歩的」対「反動的」という二項対立ともオーバーラップしているから、「進歩的」であって「西洋崇拜」や「エセ白人主義」でない行き方というのは、すごく難しい。フェミニズムもまた、少なくともメインストリームは、そんな状況から自由であるようには見えない。

自分の国で、母国語の通じる人々のあいだで、私はイギリスにいたときよりもっと途方にくれながら、それでもなんとか樂觀的でいたいと思っている。【おわり】

(ほった・みどり 英国セント大学 女性学 修士課程終了。現在、文筆・翻訳業)

※ご意見、ご感想などありましたらEメールで。

宛て先は [m.hotta@xa2.so-net.or.jp](mailto:m.hotta@xa2.so-net.or.jp)

# みにくいアヒルの子が世界を散歩

許 家玉 (キャロル・ホイ)

## 絆のファミリィ

アメ玉のような大きな目が喜びを隠せずに輝く。「あら、レミ勝っちゃったわ」……本当だ、五歳の可愛らしい女の子にトランプゲームで負けてしまった。ちよっと悔しい。大人がわざと負けてやるのが、子どもを馬鹿にされたような気にさせてしまうから、絶対にわざとは負けないようにしていたのに。あの子、本当に頭が良い。別室では、レミのおばあちゃんと私の母と祖母が話をしている。その間、私達はゲームをして遊んだり、彼女

のお気に入りのあきら君の話をしたりしていた。鄭(チョン)レミと私とは、血の繋がりでない「絆のファミリィ」だ。鄭一家と私たち許一家が、そんな、実の親戚より深い関係になれたのもレミちゃんの誕生のお陰。だからやっぱり、彼女は主役なのだ。

レミの母は広島修道大学の社会学教授、鄭暎恵(チョン・ヨンヘ)。彼女は未婚の母として子どもを産む時に、在日韓国人の国籍問題のため、カナダで出産することを決心した。子どもの国籍問題で悩んだ経験のある私の母は、知り合いの紹介でカナダに来た彼女を、半年ほど家



カット・秋山 浩

に受け入れた。出産を手伝うため、彼女の母英子さんも一緒に泊まっていた。国籍貧乏の私は、まだレミちゃんの子供の前から似た者同士の彼女を守ってあげたい気持ちでいっぱいだった。カナダで生まれたのだから、彼女も当然カナダ国籍を持つ権利がある。誕生日は一月一日——普通、その州なり病院なりの、その年最初の赤ん坊は、沢山のお祝いをもらうものなのに、母親が外国人だと分かって、レミちゃんの祝いは少なめになってしまった。人より多くの選択肢を持ち、しかしその分、選択を迫られることが多い彼女も、私のように自分の居場所を捜すために世界中を巡るアヒルになるのだろうか。しかし、五歳で私にトランプで勝つほどクレバーな子なら心配することはない。さすが、料理の腕が冴える私の父の「手作り漢方」で元気に生まれた子だ。

バンクーバーでは、私の弟が英子さんのカナダでの初運転で学校への送迎をしてもらったり……などなどお互いに助け合う両家であった。

そしてレミが三歳の時。私が研修でサンフランシスコに滞在していた頃、偶然にちょうどヨンへもバークレイ大学へ留学していた。もちろん娘連れで。そのうえ英子

さんとそのまたお母さんも遊びに来ていた。週末になるといつも、私の暮らしたのはその四世代の女性たちと一緒にだった。気も使わずに、本当の家族のように英子さんの韓国お雑煮を食べて家でゴロゴロしていた私は、それだけで落ちつけた。実はサンフランシスコにいた当時、私は将来への不安で押し潰されそうな状態だったので、家族みたいな人たちと過ごす素朴な時間が大変ありがたかったのだ。ヨンへのおばあちゃんとは初顔合わせだがすぐに気に入ってもらえた。「この子、私の好みよ。好きだわ」と言われ、何か自信が湧くのを感じた。もう一度、人生を前向きに見据える力を与えてくれる、励ましの言葉であった。西洋人は人を受け入れやすいが、東洋人ほど深い関係を作らない気がする。友達はいた。尊敬する上司もいた。しかし、何か「条件付」の関係のような気がした。楽しく遊んだり、良い記事を書いたりしなければ、必要とされないのだ。ヨンへの一家は、成功しても失敗しても、私の存在そのものを大事に想ってくれた。ファミリーは、見返りを求めない愛情の絆——。

こんなお付き合いは日本では不思議な感覚のものであると気がついたのは二年前、私の結婚式の時であった。

式には招待客にそれぞれ肩書きが必要だが、彼女たちとの関係は肩書では表しきれない。似た考え方を持つヨソへのことは先輩と思っているから「恩師」とし、心の支えであった英子さんのことは、「恩師の母」と書いてしまった。本当の気持ちを日本語では表現しきれない。

日本ばかりでなく、西洋でもよく議論されるのは、男女の友情。私の仕事仲間には、「友達」より確実に深い間柄で、しかし決して「恋人」などではない森住さんというカメラマンがいる。お互いに「戦友」と呼んでいた時期もあった。彼とは私の元上司の紹介で知り合い、アメリカで三週間の取材旅行に出かけた時から「永友」になった。アメリカの被爆者——つまり冷戦中の核実験による被害者を、時には身の危険も感じつつ取材した。ワシントン州のハンフォード市には元核兵器工場があり、ここは現在、不要となった核兵器の処理を、政府から委託された会社が管理している。私達が訪ねたのは、この会社に勤める科学者だった。彼女の研究ではいくつもの場所の危険性が判明したのに、その報告はことごとく握りつぶされ、会社は「環境上の問題はない」と発表した。彼女は事実を政府やマスコミに発表した。アメリカでは、

社会を脅かすような企業機密の公表者はその職場を法律で保証される。とはいえ、彼女も社内での居心地はたいへんに悪くなった。毎日のように嫌がらせがあった。愛猫を殺され、自宅を銃撃され、外壁には今もその弾痕が残っている。すでに業界のブラックリストに載ってしまった彼女は、もう国内では専門分野の就職は望めない。住民を守る賞や、*Scientist with Conscience Award* (モラルある科学者の認定賞) をもらったりしても、毎日の嫌がらせで彼女の精神状態は崩れていく一方であった。世の中の恐ろしさを感じ、私は泣き出してしまった。頭も心も混乱しているとき、森住さんは私が眠るまで話相手になってくれた。

長く貧乏取材をしていると、二人の洗濯物は、暇な方がコインランドリーへ持って行くようになった。ある日、私が洗濯物担当だったのに洗濯物を取材先に忘れてしまった。自分のチョンボで森住さんのパンツがなくなってしまうので、お詫びに買って返した。家族の汚い洋服はさわられるけれど、彼とはお互い、洗った後のものではないとダメ。これが私達の関係の象徴だ。

しかし、森住さんと私の二人だけではファミリーの関係にならない。別に隠すような関係でもないのです、お互



いに家族を紹介した。私は一時、森住さんと私の夫に英会話を教えていた。そして去年、森住さんの娘の一七歳の陽子ちゃんと沖繩で雨の中、コンサート会場までヒッチハイクの冒険をした。まだファミリーになりきっていないが、私と森住さんを核に互いの家族を巻き込み、次第に友情より深いものを作り上げてゆきたい。

私が生後しばらく生活していたのは、一二人が住む香港の6LDKの高層マンションだった。私の一家四人とおじさんの一家四人、おばあちゃんとその姉、そして二人のお手伝いさん。親戚も多かった。家と社会の境界がどこからなのかの感覚さえない。「親の友人」も「親戚」扱いだから、私にとっては世界が全てファミリーであった。カナダに移民してからは、華僑として生きる許一家は在住東洋人のみんなが家族のようなものであった。そのお陰で、アヒルちゃんとして世界を回るようになってからも、家族関係を築くのが私の得意技であった。

こんな私が、現在住んでいる日本で一番やりたいと思うのは、絆のファミリーを広げること。義理より愛情を中心とする関係だ。

私は「野の花の家」という千葉県の子供の施設を取材

したことがある。ここには可愛い、元気な子供たちが沢山いる。そして私の周りには結婚しない、あるいは不妊など、様々な理由で子供との出会いを欲しながらそのチャンスがない人々がいる。この人たちの橋渡しのために、私は去年クリスマスプレゼントキャンペーンを企画した。ここのある子供にプレゼントと手紙を送り、子供からの返事を受け、これを機会に親戚関係にまで育てば、と願ったことであつた。しかし、そのときの繋がりは続かなかつた。今年こそ、もつと力を入れてファミリー関係にまで深めたい。

家制度の強い日本でも、最近では血の繋がらない関係が増えていくと耳にする。例えば、共同墓地。会員形式で、登録すると亡くなった時に同じ会の人墓参りをしてくれる。自分が納まる前に、より早く亡くなった人の墓の面倒を見るというシステムである。

そして、共同老人ハウス。老人同士でお互い面倒を見合い、ルームメイト形式で暮らして行く。

昨今、こんなことをよく耳にするようになったので、早晩、日本にもきつと「ファミリー」が増えるに違いないと思う。

(キャロル・ホイ フリージャーナリスト)

## フェンスを超えて

小平陽一

3年生の選択科目で『食物』の2講座を担当している。授業の最初に、なぜ『食物』を選んだのかを聞いてみた。多くは、「食べられるから」がその理由だった。

彼らは、調理実習ばかりやるもんだと勘違いしている。「講義もあるしべ

ーパーテストもある、まあ、少しは実習もあるけどね」と言ったら、「そんなの『食物』じゃねえ。それじゃー、何のために取ったかわかんねえじゃねえか」とパニックしていた。

「だいたい、食べるには作らなきゃならないってこと理解してるかなー？美味しく作るには、知識や経験や技術が必要なんだ。そのためには、うんと勉強しなくっちゃ、わかるかなー」

「でも、結局は食えるんでしょ！」  
「だいたい奴ら、動機不純なんだ。授業というより、食うことしか考えていない。でも、「食べる」ってことに心があまるだけでも良しとするか！それってすごく大事なこともんね。」

案の定、講義では死んでしまう彼らも、実習では見違えるように生き生きする。その顔見たら、講義より実習だ、ってどうしても思うよ。あの満足そうな顔、もー、すごく可愛いんだ。

先日、2年生が3年次の選択教科を選ぶ時期が来て、その説明会があった。そこで、『食物』の授業は、学ぶことが主体で、実習ばかりではないと釘をさし、安易な気持ちで選ばないことと話した。これでも来年は、もう少し違った授業展開が期待ができるわけだ。

部活に顔を出した折、2年生が「先生、来年の『食物』は実習が少ないんでしょ？」と聞いてきた。だから「ウン、そうだ。調理科学と栄養科学だ」と、わざと難しそうなイメージの単語を並べたが、そばにいた3年生が「そんなことないよ、今、けっこう実習やっててすごく楽しいよ。ね、先生！」なんてバラしている。

廊下ですれ違った2年生、嬉しそうに、「先生、あたし『シヨクブツ』取ったの、『シヨクブツ』。宜しくね」だつて。あー、来年も思いやられるー。

(こだいら・よういち)

## 私の家庭科



梶原 公子

「家庭科の授業では年間通してどんな内容をやっていますか」という質問に、教科書にはない独自のよく練られた教案を期待されると、とてもがっかりするような答えになってしまいます。というのも、実のところ私は教科書にかなりきつちりと添ったオーソドックスなものをやっているからです。家庭一般4単位を二年間に振り分け、およそ次のように淡々と進めているのです。

一年生……被服、保育、住居の分野

二年生……食物、家庭経営、家庭経済の分野

実習もきわめて教科書に忠実です。例えば調理実習の第一回目は「親子丼、すまし汁、青菜のおひたし」。こ

のメニューはほとんどの教科書が取り上げており、調理実習の定番と言えます。ごくありふれたメニューとはいえ教材としては奥深いものがあり、毎年新たな発見があります。今年も多く生徒が次のような感想を述べました。「かつおぶしや昆布を使って、本格的なだしを初めてとった」「とり肉を切るのは初めてでとても大変だった」「親子丼は長ねぎより玉ねぎの方がおいしいと思う」etc.

教科書に準拠した授業をやっている理由は色々あるのですが、そのうちのいくつかを挙げてみます。

①教科書には、今、かなり新しく良い資料が載っている。それらを利用すれば、新たな資料を教員が用意しなく

てもよい。労力の軽減と紙の節約が図れる。

② 共修になって以来、教科書の内容の精選と充実が進み、積極的に生徒に読ませたいというものになっている。

③ 家庭科でとらえたい全体像を示すことができる。

④ 家庭科を他の教科と同じように、教養科目のひとつとして捉えてもらうためには、教科書を使って体系的にやってみるのは効果的である。

そうは言っても教科書にないことも色々やるわけです。例えば被服で「平面構成と立体構成」を考えるところがあります。「モンペハウス」の内山裕子さんのオリジナルスーツは、その良い教材だと思います。私は半円形のブラウスとシャルワールというパンツのスーツがかなり気に入っているのです、これを授業で着て生徒に見せたりします。シャルワールは、大工さんがよく履いている太もものあたりがダブツとしているズボンに似ていて、太もものあたりがゆつたりしているのでどんな姿勢になっても大変楽なのですが、生徒たちの大半はこれを見て異口同音に、「変だ」と言います。高校一年の私の娘も「お母さん、あれを履いて人前に絶対に出ないで」と哀願します。一方このスーツを着てみせなかったクラスの生徒は、「先

生、今度必ずあれを着て来て」とリクエストするのですが……。

また、「被服管理」では自分の衣服の持ち数調べをして、各シーズンごとに自分の衣服の枚数を書き出して一覧表にし、総合計を出します。学校では思い出す限りにして、宿題として休日を利用して調べてもらいますが、中には「久々にタンスや押入れの整理をしてみました」という生徒もいます。多くの生徒はこの宿題をやる前は、「自分は服を持っていない」から「制服が廃止になると、着ていく服がない」とか、「服をもっと買いたい」と言うのですが、結果は平均すると一人八〇枚、多い生徒は一八〇枚以上です。このような状態は日本をはじめとするいわゆる先進国は共通のようで、「食」だけでなく「衣」にもまた南北問題があるということなのです。

締めくくりにフリーマーケット「タンスのこやし展」をやります。自分がもう絶対に着ないであろう服、誰かに活用してもらいたい服を持ち寄り、教室に並べます。衣服には一点ずつ、どこでいついくら位で買ったか、なぜ着なくなったのかなどを書いたカードをつけます。生徒はそれらを自由に試着し、気に入ったものがあれば持ち主に断って貰うことにします。これは生徒にとつて実

益もある楽しい企画だったようで、その後三島市主催で行われたフリーマーケットに何人かの生徒がお店を出していました。

さて、現在の私の勤務校は、九五%までが大学や短大に進学する女子だけの高校です。生徒は親や社会が「豊か」になった時代に「数少ない子ども」として「大切に」育ったという感じで、家庭では勉強や塾、ピアノなどの習い事が第一という具合。そのような背景もあって、かつてよりもいっそう生徒の生活は実生活から遊離したところで営まれているように思えます。しかし、子どもたちの生活感のなさというのはとりたてて進学校に限った現象ではないように思います。それは中・高が受験至上主義で動いている現実がいまだにあつて、学校で勉強したことが受験と直結しているため、大半の教科で勉強している内容が授業や試験の範囲内で完結しているからで、それに対して、家庭科だけが学校の授業の外にこぼれ出し、自分の生活と結びつけて考えていかななくてはならない教科である、という性質を帯びています。

ところが、生徒の実生活はとても希薄になっていて……食品添加物のことを授業でやったすぐその後で、缶ジ

ユースとコンビニのおにぎりの昼食を食べる生徒を見て、無力感を覚える教員はおそらく私だけではないと思うのです。家庭や生活のことを学ぶにしても、その家庭や生活そのものが、どうも生徒にとつて実感の薄いものになっている。そしていわゆる「勉強」というのは学校の中だけで、受験の知識として役立つものであるという思い込みがあるので、家庭や生活のことを深く考えるということが定着していないのだと思います。

更に授業をやっていてよく感じることをもうひとつ書きたいと思います。被服の導入の部分で、制服についてとりあげます。制服の歴史、制服の機能（なぜ日本の学校は制服をほとんどが採用しているのか）、制服が不便である点などを勉強するわけです。最近各出版社から出されている様々な資料集も、このことをとりあげているものが数多くあります。けれども授業後、再び生徒に制服の賛否を聞くと、必ずと言ってよいほど「それでもやっぱり制服は必要」だと七割以上の生徒が答え、その理由として「毎日何を着ていくのか迷わなくてよい」が大半を占めるのです。なぜ、このような結末になるのでしょうか。昨年、大阪の羽曳野市で学校の先生に制服を着せ

ようという案が出て問題になったことがありました。そのことを学校で話題にしたところ、ある三十代の女性（教員）は「私は楽だし、賛成だな」と答えたのには、全く驚いてしまいました。私は服を買うのは趣味と言つてよいほどです。いえ、服だけではなくアクセサリー、バック、靴、小物、すべて次は何を買おうか考えるのは大好きです（ああ、「タンスのこやし展」と矛盾している）。化粧もするし美容院やエステにもよく行きます。ある時、行きつけの化粧品店に行ったところ、その美容員さんが、若々しく見えるメイクをしてあげましょうと言つてあれこれ講釈しながら私に化粧をしてくれました。そして彼女いわく、「どうして学校の先生つて、化粧やオシャレがうまくないのでしょうか。結構いいスーツを着てるのに化粧がダメで台なしになるっていうこともあるのよ」。私は「ああ、なるほど」と思つたのです。

料理の上達がそうであるように、衣服の着こなしやオシャレもエクササイズです。学校でも、もうそろそろ本当の意味でのオシャレの仕方を、授業のどこかできちんと学ぶ機会をつくる時期に来ているのではないでしょう。生徒は、いや生徒だけでなく先生も、「自分を美しく見せるにはどうしたらよいか」という、いわゆるオシ

ヤレの仕方や考え方を学ばずに来てしまつてゐる。だから先生はオシャレが下手。生徒も制服を離れて自分独自のオシャレをしようとした時、学ぶ先が流行のファッション雑誌一辺倒になつてしまふ。一方、学校ではルーズソックスやピアス、茶髪、化粧を禁止していますが、生徒は自分なりにオシャレをしたいので、ピアスをしたり超ミニのスカートをはいたりするわけです。制服を見直すのと同時に、時代や文化の要請として、高校生のトータルなオシャレのエクササイズをきちんと位置づけたらどうかと思うことしきりですが、家庭科でそれができるのかどうかは、はなはだ疑問です。

最後に、これから数多く取り入れたいと思つてゐるのが、デイベートやディスカッションを中心にすすめていく授業です。拝聴している受け身の授業でなく、授業に臨む前に生徒が十分な予習をして、ひとつの意見を持つて臨むという方向です。そんなことを書くと、「そりゃあ、デキの良い学校だけでやれることだよ」と一笑されてしまふそうですが、そこまでやらないと家庭科って面白くないし、少しでもこれができる層を厚くしていく必要がある、などと考えているのですが、いかがでしょう。か。

（かじわら・きみこ 静岡県立高校家庭科教員）

風がかわる  
匂いがかわる

## 「自分」探し

— 《異性にききたいこと》を通して

………  
分校 淑子

『自分』探しの授業をしよう

私は、家庭科の授業を通して、生徒たちの内面にいろんな刺激を与えたいと思っている。そして、生徒自身と私自身の価値観を耕していきたい。

昨年の三学期、一年生を対象に「『自分』探し」セクシユアリティをみつめて」という授業を行った（全体像は次頁に示す通りです）。授業の一番はじめに生徒にこのように話した。

「私もそうだったけど、高校生の頃って、自分自身について考えることが多いんじゃないかな。今学期の家庭科では私からいくつかのテーマをだします。そのテーマ

にそって、『自分はどうだろう』『自分らしさって何だろう』って自分自身に問いかけてみてください。授業の主な役は、あなたたち一人一人です」。

《異性にききたいこと》をきいてみよう

四つのセクシジョンのうち、今回は、特に生徒が主役となった②『異性』の授業風景を紹介してみたい。

多くの高校生にとって異性の存在はすごく大きい。そして、異性は一番身近な異文化だ。何を考えているのか、どう思っているのか、聞きたくて知りたくて仕方ないけど普通は面と向かって聞けない。思春期のその溝は

① ジェンダー……………	2時間
「ジェンダー」と「セックス」	
② 異性―一番身近な異文化―……………	4時間
異性への質問・回答・集計・結果と考察の発表	
③ 美の鎖……………	2時間
美を求められる女性、その背景	
④ セクシュアリティ……………	4時間
映画「告発の行方」を通して	
自分のセクシュアリティをみつめる	

まだ何となく可愛らしいけれど、もしかしたら、それがそのまま男女の生活や価値観の隔たりを作っていくのかもしれない……。

女子のみの家庭科の頃、遊び半分で、私がいくつか質問（例えば「賢い女の子はもてない」や「愛さえあればセックスOK」など）を出し、YES/NOで答えさせていた。ある年、それにいたく興味をもったクラスがあった。彼女達は「男子にも聞いてみたい！」と言いだし、みんなで質問を考え、放課後男子に答えてもらい、またみんなで集計した。これはとてもおもしろく、かつすごく勉強に思った私は、男女共修の授業での方法を試行錯誤した結果、こんなふうになってみた。

まず、前の授業で《異性にききたいこと》を一人一問考えてくるよう言っておき、それを各自無記名で紙に書かせ、男女別に集める。それを私が、一つずつ番号をつけながら黒板に書き写す。生徒は、あらかじめ番号と切り取り線のみ印刷してあった用紙に回答を書き、切り離し、同じ番号の書かれた袋の中に入れる。全員が提出し終わったところで、生徒に、自分の質問だろうがそうでなかろうが、自分が集計したい質問を選ばせる。もちろん何でもいいという子もいるから、残ったものは、出席順などで振り分ける。各自決まった番号の用紙を持っていき集計し、結果と自分なりの考察を発表する。

質問の内容は本当に様々だったが、男↓女ではやや性的な内容が目立っていた。その中で「処女ですか？」という質問があった。結果はYES一五人、NO三人。今の高校校生にしたらYESが多いなあ、とお思いの方も多いだろうが、実はこの数字は、本校にとってはものすごくショックなものだ。正直私もびっくりしてしまった。本校は、一応偏差値は県下でトップ。しかも地方の国立の附属だから、都会のエスカレーター式有名私立の香りもあって、来ている生徒は全部とは言わないまでもおぼっちゃまやお嬢様が非常に多い。つまり裕福で、



教育熱心の家庭に育った頭の良い子が揃っているのだ。この雰囲気に時々私は息がつまりそうになったり、おそろしく惨めな気分にはせられたりするのだが……それはさておき、そんな学校の一年生の女子なのだからNO3人という数字は驚くべき数で、しかもそれを正直に書いたということ、男子諸君が驚愕したのも無理はない（ちなみに他のクラスでは、女↓男で「あなたは童貞ですか？」という質問があったが、全員YES……男子諸君の顔に安堵感が漂っていたのは言うまでもない）。そして男子の感想の中に、「したことのある女が三人もいた……。手が震えて字がムッチャ書さづらい。まあそれほどまでにショックを受けたと思ってください。……女を見る目が変わりそうでコワイ」等があった。「やったことのある女なんか信用できない。この学校にそんなヤツはいらない」と、ある男の子が授業後騒いでいたことを、NOと答えた女の子の一人が怒りの手紙で私に教えてくれた。いくら温室育ちのおぼっちゃまだって、ここまでくると私も「あなたの大好きなママだってそうでしょー」と皮肉の一つも言ってみたくなくなった。なんでそんなことで女の値を決めつけ差別するのか。だいたい、考えてみればそんな質問自体失礼だ。どんなものであろうが生徒の書いたものは全てそのまま出す、というのがこれまでの私のスタンスだったが、今度からは答えるに値しない失礼な問題だと思ったら『回答を拒否します』と書いていいことをはっきり付け加えようと思った。

さて、女↓男では「もしあなたが女の子として生まれていたら、このクラスの男子でどの人を好きになると思いますか。理由も付けて教えてください」という質問があった。なかなかおもしろい人気投票となり、一位に輝いた、正直言ってそれほどブルックスがいいとは言えない男の子は、「どうしてぼくなんか……」とはにかみながら嬉しそうにしていたのが心に残った。後日、その子とゆつくり話す機会があったのだが、一位は伊達じゃないことが何となく理解できた。

### 生徒の感想から

この授業は確かに盛り上がった。もちろん生徒の中には「おもしろかったけど意味はなかった。単なる先生の趣味の領域じゃない？」という感想を書いた子もいる。確かに私も嫌いじゃないからやっているんだけど、単に「おもしろい」だけでもないと思う。

ジェンダーの授業と関連させてこの集計結果を考えた

生徒も多かった。考察として「女性はジェンダーで恋をして、男性はセックスで恋をする」と、ある男の子が言っていて、クラス中から「名言だ！」と言われていた。私は、それこそがジェンダーかもね、と思いながら、④の『セクシュアリティ』の授業につなげるため、ここではその言葉を飲み込んだ。「何となく男子は女子よりも自分を大切にしているなど思った」というような分析をした生徒が何人かいた。私はその横に「そうだね、女の子は自分よりも自分以外の誰かを大切にするように育てられてきたのかもね」とコメントを入れた。「男子はやっぱり外見で女の子を選んでる」という女の子の怒りや落胆も目についた。それはそのまま③の『美の鎖』へとつながる。「同じ女子でも私と考え方が違う人が沢山いるんだと実感しました。男子と女子で違うというより個人で違っていて感じだった」……そうだね、男・女で何でも括ってしまうのは考えものだよな。

授業全体の評価としては、「自分たちで考察を言えるのが良かった。『考察』でその人の考えを知ることができた」等、考察を言えたこと、聞いたことに対する評価が高かった。結果そのものはもちろんだけど、出された問題や集計した人の考察にも、たっぷり個性やその人の

価値観が表れる。そして全体を通してこの生徒たちの世代のカラーや学校のカラーがよくでてくる。だからこそ生徒にとつて興味が有り、意味があるのだと思う。私は、それをできるだけ邪魔しないようにそっと気づかせてやりたい。

「学校ではタブーとされていることを今回は思いっきり書けてよかった」「こんな授業の方がテスト用の授業よりズーッと大切だと思う」「この授業は調理実習と並ぶくらいいい授業だった」。うーん、最後の感想は私にとつては不本意だけど、生徒にとつては最大の誉め言葉なんだよね。結構みんな自分自身をしっかり見つめながら、この授業の価値を見いだしてくれたようで嬉しかった。

最後に、これは前述の方法で少しでもフォローしようと思うけど、「不愉快で答えたくない質問もあって嫌な気分になった時もあった」という感想や、「男女共通の問題もやりたかった！他のクラスのも聞きたかった！他校とも比較したかった！」という希望を次回への課題としたいと思う。

次号では、私が最も難しいと思う『セクシュアリティ』の授業を紹介したい。

(ぶんこう・としこ 金沢大学教育学部附属高等学校)

「これが、高校生か？」授業が成立しなかった最初の二年くらい、目前の生徒と自分の高校時代やそれまでの高校生のイメージとのギャップに苦しみました。これは自業自得で、子どもたちがバカにしていたのですから、子どもたちが大暴れするのは当然のことでした。

子どもたちの魅力が見えはじめてようやく、「これも、高校生！」そう感じて、授業できるようになってきました。

さて、前回お話しした工業科のやんちゃクラスに行くと、教室に入った瞬間に毎度お騒がせのひとりK君が開口一番。「せんせー、谷内先生は？」と聞いてきました。谷内先生は一緒にこのクラスの授業を担当しています。(工業科の家庭料は教員二人で担当)谷内先生はとっても素敵な女性の先生です。人間的な魅力に加え、若くてきれいな、生徒に人気の先生なのです。

# 潮風の荒く

江口凡太郎

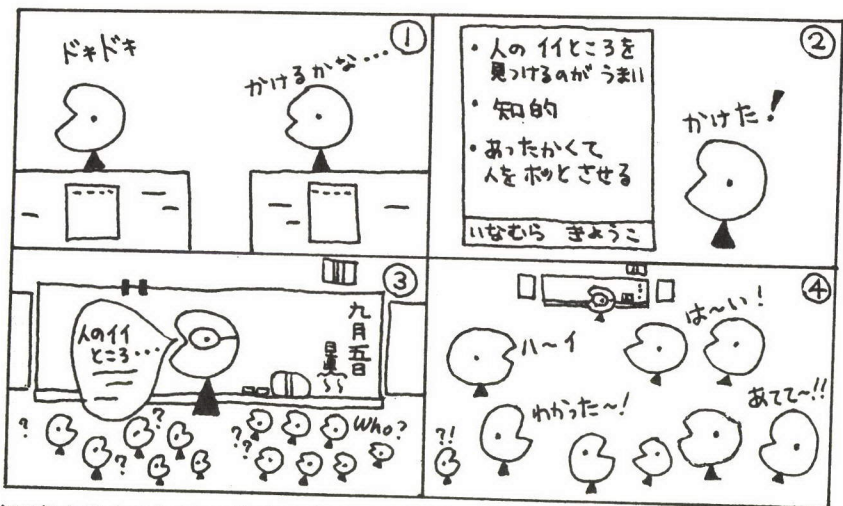


「谷内先生は今日出張でないよ。」  
「つまねえー！」Kは大声でそう言うなり、寝てしまいました。Kは好きな先生がいないと知った瞬間に授業

すると、まわりからも「あーつまねえー」という声が次々聞こえてきました。しかし、前回のやりとりを覚えていたのか、中には「やめろよ。先生いけるじゃねえか」というような声もちよつとはありました。しばらくワイワイやっていました。授業に入りました。結局、Kは宣言通り、一時間いっぱい寝てしまいました。

翌週、谷内先生が登場すると、Kはさっそくそばに行つてちよつといたずらをしたりして、チヨロチヨロして注意されていきました。それでも、そばを離れたくないのか、「先生なんか手伝わない？」と一所懸命アピールをしていました。無精髭にズリ下がったズボン姿という、今時の高校生Kは、仕事をもらつてうれしそうに谷内先生の横で手伝っていました。これも、高校三年生！とても、かわいい奴のひとりです。  
(えぐち・ほんたろう)

不参加を宣言し、学生服を頭からかぶり熟睡態勢に入りました。  
「K夫！そりゃねえだろ、今日は俺の授業聞いてくれ」。



(用意するもの) B5半分の白紙×人数分

カット・加藤昭仁

### (やり方)

- ① 白紙を全員に配る。
  - ② 白紙の下の方に、各自、自分の名前を書いてもらい、名前を隠すように内側に折り曲げる。
  - ③ 一旦、教員が全員分を回収。
  - ④ バラバラにして、再び全員に配る (この時、絶対に友だちに見せないようにさせて下さい)。
  - ⑤ 自分の所へまわってきた紙に書いてある友人 (まれに自分の場合もある) の、ステキなところ、イイなあとと思うところを、3つぐらい箇条書きで書いてもらう (ムズカシければ、メガネかけてる、髪が長い……などでもOKとする)。
  - ⑥ また、全員分を回収する。
  - ⑦ 教員が一枚一枚読み上げる。「ステキなところ」から、それがクラスの誰のことかを、手を挙げて答えてもらう。
  - ⑧ 正解ならプラス2点、はずれたらマイナス1点、自分の事を当てたらプラス5点 (はずれたらマイナス5点) として、全員分が終わるまでチーム対抗で競い合う (僕は座席のタテ2列ずつを1チームとしました)。
- ※ 優勝チーム全員に、チロルチョコレートをプレゼントしました。

### (参考にしたもの)『教室の定番ゲーム』(仮説社)

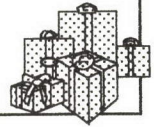
このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからの〳〳掘り出し物〳〳(教材や教具、本、ビデオなど)をお待ちしています。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局:加藤昭仁までお便り下さい。(〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869)

(かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭)



## 楽市楽座

加藤昭仁



### <ワークショップ〈ステキ捜しの巻〉>

「教材を触媒に、自分と他人のスバラシサの発見の場となるような、時間と空間の演出家（＝教師）になりたいのだ」。な～んてエラソーな大学の卒論書いておきながら、やっぱり現実は厳しくて。少ない時には、生徒が15人くらいしかいない教室。マンガあり、ウォークマンあり、おしゃべりあり、立ち歩きあり、スケボーまであり……と、スバラシサよりも、サマジサの方が目立ってしまうのが、日々の授業だもの。

でも、ならばせめて、一年に一回くらいは、卒論に書いたような演出家々になってみたくて、恐る恐る始めたのが、〈ステキ捜し〉だった。

授業っていうよりは、もうほとんどゲームに近いものだけど、どの学年、どのクラスでも、すごい盛り上がりとともに、あったか～い雰囲気教室に広がっていくのが、とてもイイのです。

生徒の感想も、「とてもおもしろかったです。なんかはずかしいけれど、楽しかった」「仲よくても、いざ言葉にして書こうとすると、むずかしい。自分がどんなふうみんなに見られているか、わかってよかった」「面白かった、はずかしかった。けれど人をほめるというのは、とてもいいことだと思う」と、なかなかGoodでした。

「アメリカの学校じゃさあ、お互いズケズケもの言っているように見えるけど、よっぽど親しい間柄になる前は、まずはお互い、ホメて、ホメて、ホメまくるんだって。相手と意見が違っちゃう場合も、絶対相手を全否定したりせずに、必ず私はこう思うって言い方をするんだって。日本とは、文化も習慣も違う国のコトだけど、こういう所はマネしてみてもい～んじゃないかな」と、授業の後、キレイにまとめるカトーでした。

いや～やっぱり、国は違えど、大人も子どもも、人はホメられて育つもんなんじゃないでしょうか。

## ほんとうの「羊たちの沈黙」(承前)

そしてぼくはもう一つの錯覚に気がついた。死の床にある妻を看病していたクロフォードが深夜ふと立って窓に倚り、煙草をくゆらしながら月の光に照らされた街路を眺めるシーン、それがビデオ版ではやはりカットされていると憤慨していたのだが、どうやらそれも映画にはない、自分が勝手に作り出した架空のシーンだったらしいのだ。

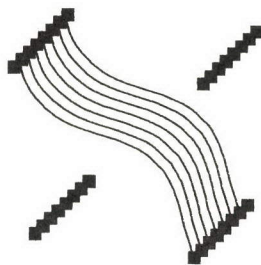
連日の徹夜の看病でやつれたクロフォードはスコット・グレンの横顔、月光に照らされた街路の木立、かすかに漂う紫煙、昏々と眠る愛妻ペラー――。

ぼくの頭蓋の中に存在する本当の「羊たちの沈黙」において、そのシーンはくつきりと存在している。そしてぼくは、クロフォードが傍らのベッドで眠る妻にしみじみとした愛情を覚えつつ、一方で、自分を慕ってFBIの行動科

学課に職を得ようと意欲をもちやしている若いクラリスの姿をも月の光の中に思い浮かべているそのシーンを、ああ、なかなかのものじゃないかと思いつづけてきた。それが、ほしのままの夢想でしかなかったとは。

現実と夢想とがなまじりになつたもうひとつの現実を平然と心にかかえて生きていく、それもまた映画館の暗闇で育ててしまった独特の凶々しい力であるが、おれはこの魅惑的でもある力をうまく飼いならしていくことがこれからもできるだろうか、それとも、ついにその力に振り切られて混濁した老いの坂道を蹠踵と下っていくことになるのだろうか。半ば興味津々、半ば戦々兢兢々と考えている所だ。

さて、「羊たちの沈黙」のラスト・シーンになぜあれほど



ひかれるのかといういろいろに考えて、やはり視線の問題がかわつてゐるのだろうとほくは今考えている。

ジョナサン・デミは、チルトンのあとをつけて陶然と雑踏の間を行くレクター博士の後ろ姿が見えなくなつたのもカメラをそのままにして延々と夕暮れていく道をうつしつづけ、ほくは椅子に座りつゝいたままカメラのこちら側にあるジョナサン・デミの視線に自分の視線を重ねてレクター博士の歩み去つたその先へと慄えつつ思いをはせる、そのように視線が画面の向こうへ向こうへといざなわれることによつて生まれる心身の伸び伸びと解き放たれたような快感――。

「許されざる者」(クリント・イーストウッド)のラスト・シーンにしてもそうだった。延々と夕映えの丘と空をうつしつづけるカメラのこちら側にそれを見つめるものの視線を感じ、それに自分の視線を重ねることによつて、その丘の向こう、夕映えの空の向こう、老ガンマン・マニーの去つたその先へと思いはせ、ほくは陶然とその映画「許されざる者」の余韻にひたつたのだ。そして、そうした事態は、癌を宣告されたのちに、慶応病院の六階の病室の窓から朝空や夕空を眺めながら心が遠くへ遠くへといざなわれ、いくように感じたあの至福の感じととてもよく似ている

ことに気づく。どうやらほくはその時、映画を見つづけてきたことによつて習い覚えた心身の解き放ち方――座りつゝいたまま視線を遠くへ遠くへと伸ばしていく快感の型を、そのような危機に際していつのまにか模倣していたようなのである。映画館の暗闇の中に身を置いたまま、スクリーン上に遙かな夕空や向こうへ向こうへと行く道を見ることが、それは死の予行演習をしているようなものかもしれないとほくは今思つてゐる。願わくば、やがておとずれるはずの本当の死に際して、そうした夕空や夕暮れの道の展望が自分において恵まれんことを――。

では、ひるがえつて「羊たちの沈黙」の自分におけるもう一つの魅惑、ファースト・シーンの魅惑は、いかなる性質のものなのだろうか。

ハワード・ショアの音楽が緊迫した静けさをかもし出す中、長く尾をひく鳥の啼き声が森にひびく。

一本の綱をたよりに谷の底から急な斜面を若い女が一人登ってくる。登り切つて一息つき、トレーニング・ウエアの女は森の中を駆けて行く。ポニー・テイルが揺れビラスが小さく耳に光り、汗が、トレーナーの胸をVの字に濡らしている。

「スターリング！」

走って行く女の背に声がかけられる。

「クロフォードが呼んでいる」

「サンキュー・サー！」

札を言つて女は来た道を駆け戻つて行く。それを見送る男の紺の帽子に「FBI」の白い文字がくつきりと見える。

その男、射撃教官ブリガムの氣づかわしげな目。

その視線を背にクラリス・スターリングが駆けおりていく森の中の一本の木に、

HURT

AGONY

PAIN

LOVE IT

(苦しさ、悶え、痛み、それを愛せ)

と記した木片が四枚打ちつけてある。

向上心に燃えて駆ける若い女を励ますのに、これほど美しく悲壮な言葉があるだろうか。

ブリガムの視線は揺曳してクロフォードに引き継がれる。

行動科学課の部屋についたクラリスが背中中の皮を剥がれた女の惨殺死体の写真をみつめて立ち尽くしているその背に、「クラリス！ クラリス・スターリング・M」と声がか

けられ、ふりむくとクロフォードが戸口に立っている。彼もまた写真に見入っているクラリスをしばらくの間みつめ、それから声をかけたのだ。

「クラリス、君は怖がりか」

クロフォードはやはり氣づかわしげにクラリスをみつめ、嚴重な注意を与えてレクター博士のもとに送り出す。その視線は、ボルティモア州立病院嚴戒棟の看守にバトン・タッチされる。

重い鉄格子のドアの向こうに踏み入ろうとするクラリスに、黒人の看守はやさしく声をかける。

「監視しています。だから大丈夫です。行きなさい」と。

男たちのそのような視線に支えられてクラリスは待ち受けるレクター博士の凝視の前に立つが、ミッグスのおぞましい行為に激怒した博士は、一度は追い返しかけたクラリスを大声で呼び戻し、「昔、わたしの患者だったミス・モフイットを捜せ。すぐ行け！」と叫ぶ。

こうしてクラリスは、ブリガム、クロフォード、看守、レクターとバトンタッチされたへよき視線へ父親的な視線に見守られつつ、好色のチルトンをはじめとする男たちの(悪しき視線)と闘い、最後に、地下室の暗闇の中で、赤外線ゴーグルを装着して背後から迫る鬩るような犯人の



視線を振り向きざま銃で射ち碎くにいたるのである。

クラリスはそこにいたる過程で二度、挫折しかけた時に、死んだ父親の思い出を幻視することによって闘志をかきたて立ち直る。そのように、クラリスを根本において支えるのは死んだ父親の思い出であり（母親の思い出もまた危機に瀕したクラリスを支える原作と、その点で映画は大きく異なっている。映画において、母親の存在は捨象されている）、クロフォードやレクターのクラリスに対する愛情は、その根源的な〈父の視線〉を代行するかのような装いのもとでクラリスに注がれる。だから、表彰式の会場の隅から見守るクロフォードは、クラリスにむかって、「パーティは苦手だから失礼する。亡き父上もお喜びだろう」と声をかけ、つましく静かに退場するわけだし、レクター博士は、「クラリス、子羊の悲鳴はやんだか」と電話で問い、「逆探知は無理だ。わたしの事をほうっておいてくれ」と言い残して、チルトンを食らうべく歩み去っていくのだ。「ドクター・レクター、ドクター・レクター！」とむなしく呼びかけるクラリスの声を背に。陶然と。

二人の男は〈父の視線〉を引き受けそれを装おうといった形をとることによって、若いクラリスへの不可能な愛を心中ひそかに保存したのである。

※ ※

最近クリント・イーストウッドの「目撃」を見て、映画の快楽を満喫した。と同時にいささかのうしろめたさも。

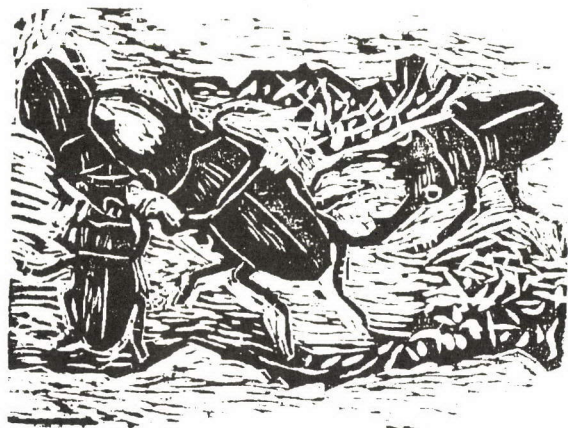
冒頭、宝石を盗みに入った初老の怪盗が豪邸の寝室にしつらえられた大きなマジック・ミラーのこちら側にあつて身動きもならず、凍りついたように椅子に座ったまま目の前で展開される濃厚な情事とその果ての殺人を目撃させられるそのシーンは、そのまま映画館の暗闇の中に匿名の存在、零ゼロの存在としてある観客が目の前のスクリーン上に展開される劇をみつめるそうした映画の構造、映画の快楽を象徴しているようで、非常に刺激的だった。

「許されざる者」につづいてジーン・ハックマンが倒錯的な殺人者を演じるそのシーンは恐怖にみちていながら妖しい魅惑を発光し、ほくは初老の怪盗クリント・イーストウッドとともに視線だけの存在となつて慄えつつ陶酔したのである。闇の中で。

けだし映画とは——窃視である。映画を見るとは、なかなかにあぶない所業なのである。

この世界をおおう蒼空というマジック・ミラーの向こう側でぼくたちの生を窃視している零ゼロの存在は映画の好きな神。そんな思いつきの妄想をほくは今愉しんでいる。

# わきわきおんぼ 産良米



夏休みの真っ最中である。でも今の子どもは、かわいそうな気がする。0-157発生によるプール閉鎖や、ようけの宿題、はてはジャズダンス・水泳教室・ピアノ教室、そのうえ進学塾・学習塾と大人顔負けの忙しさである。

「おっさん」から見るとこれは異常である。「おっさん」は、自慢ではないが「おけいこ」「習いごと」は、やったこともないし大嫌いである。

昔は、特に田舎ではあまりなかったように思うが……。かすかにあったのが「習字」（寺の坊さんが先生になって）、「そろばん」（いわゆる珠算で検定試験があった）である。実は、仕方なくみんなと一緒に習わされた。ところがものみごとに「三日坊主」であった。本当に三日で辞めてしまった。

しかし、「おっさん」になっても子どもどものときに覚えた遊びに今も興奮している。それは、「さかなとり」と「虫とり」だ！

今回は子どもの時の「虫とり」にスポットをあててみる。夏休みの一日の日課は、こんなふうだったとおもう。

当時の先生に感謝するのは、宿題は「夏休みのとも」（うすい冊子、ドリル？）一冊と、

「自由研究」一作であった。午前中は、① 早朝「虫とり」（ここで言う虫とりとは、クワガタ中心の虫とりである。なぜか能勢では、『げんじとり』（源氏と平家の）」と言っていた）。② 漫画三昧（当時読んでいたのは、週刊少年サンデー・マガジン・キング・少女フレンド・マーガレット・月刊冒險王・少年・少女など……なぜか少女漫画も見ている。姉が二人いたせいである）。午後は、① 川で泳ぐ、魚とりもする。② ねき（近く）の駄菓子屋でアイスキャンデーやサツカリン入りのかんからかん（固い）の凍った5円のジュースを吸って5円のための足をしゃぶる。③ 夕方「虫とり」（いよいよ本日のメインイベント、早朝の虫とりは、予行演習みたいなものである）。

この夕方の「虫とり」は、いつも泳ぎ仲間の2、3人で行った。雑木林の入口に入ってくると、足早になって体全体が興奮してくる。雑木林特有のうす暗く湿ったじっとりとしている空気……。クヌギの『蜜酒場』（木の樹液が出ている光った部分、甘酸っぱく時にはえぐいような強烈な匂いが立ち籠めていろいろな昆虫が集まっている）を見つけると、ワクワクドキドキ胸が高鳴ってくる。

々おるわおるわ……うじゃうじゃと……。アリ、アリ……。アブ、ゴマダラチョウ、スズメバチ、アオカナブン、クロカナブン……。おった！クワガタや！カブトや！

獲りたいのはクワガタとカブトである。しかしまずは、スズメバチを追い払わないとあかん。こいつに刺されると危険である。弱い人は死ぬ場合もある。

スズメバチを竹の棒で追い払う！するとこちらを目がけて飛んでくる。一人は、「おとり」になって逃げる。もう一人は、竹の棒でつついた時にクワガタが死んだふり？をして草むらの中（それも腐葉土の中）にポトリと落ちるのを追跡して捕まえるのである。これは「瞬間芸」である。

緊張感と集中力と『勘』である。もう必死だ。汗ダラダラ息ハァ……。 （次号に続く）

# 変な子じゃないよね

文-滝野澤直子

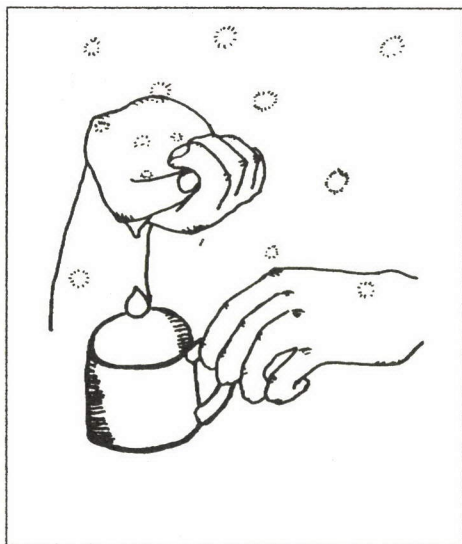


イラスト 滝野澤直子

雪の日、川沿いの道で、二人づれの青年に呼び止められた。一人は日本人でもう一人は多分アメリカ人。同じようなディバックを背負った、どこか似た感じの二人だった。

「ちよっと、いいですか」。やっべえ、宗教につかまっちゃった。四校時目の講義は出ないとまずいんだから、と時計を気にしながらも、無視して通りすぎるのはもったいないような気もして、オーバーのポケットに手をつっこんだまま、私は小さくうなずいた。

ファイルを開いて馴れた口調で「神の国」の話始めた二人に、綿雪が降っては積もる。見る見る白くなる肩や帽子を気にもとめず話し続ける人懐っこい笑顔を眺めていたら、うらやましい気持ちの反面で、いらだちがムクムクふくらむのを感じた。

「もっと詳しくお話したいので、ぜひ一度教会へ来てください」。お話だけなら、と承諾すると、二人はしきりに手を振って去っていった。

神様なんかいるもんか。あの無邪気な信仰心を揺さぶってやりたかった。どんなに熱心に話しても、私を納得させられやしない。ほら、こんなにきれいな雪も、ポケットから出した掌にあえなく消えていくじゃないの。絶対に変わらないものなんてあるはずがない。

橋の上に来て立ち止まると、景色がどうも平べったく見えた。北風に背を丸めてす

れ違つていくおばさんも、ぬかるみながら走つていく車も、テレビの一場面のようで、すべてが実は赤青緑の点の組み合わせにすぎず、だれかがスイッチを切つてしまえば何もなくなつてしまう気がした。私に赤く見えているものも、違うだれかには青く見えているかもしれない。私が私の顔だと思つている形も、他の人には違う形に見えるのかもしれない。本当は私という人間も、実在しないんじゃないだろうか。そんな空想にふけつていると、とても肩が軽くなった。何も私を縛らない。夢も目標も努力もいらんだ。

前向きで明るい彼らをいつかやり込めてやろうと、私は教会へ通い始めた。お話も一通り聞いた。賛美歌も歌い、日曜学校へも行つてみた。くだらなく無意味に思えた儀式や集会やレクリエーションは、やってみると新鮮でおもしろく、教会通いは何か月か続いた。

「神様を信じられるようになりましたか」。折りにふれ期待の眼差しを向ける彼らに、私は首を横に振りつづけた。もはや彼らを批判する気持ちは消えていたけれど、神様に絶対的に支配されて正しく生きるなんて、考えただけでも苦痛だった。彼らと友だちごっこをすることは楽しくても、本気で手をつなぐ気にはなれなかった。

プログラムの最後に、彼らは断食を勧めた。二十四時間断食をして祈り続ければ、神様の声が聞こえるはずだと。それでだめなら、もう勧めないつもりらしかった。

断食を始めた私は落ちつかなかった。もしも神様の声が聞こえてしまつたらどうしよう。善良な彼らとともに生きていくのは、安らぎのようでもあり、苦しみのもようでもあった。しばらくして空腹感が静まつてからも、神様の声は聞こえない。もう少し。あと少し。ほんやりした頭でハツと気がつくと、私は喉の渇きのあまりに、水を飲んでみた。

ついに神様の声は聞こえなかった。それは断食をなし遂げられなかった罰だったのだろうか。でも私には、神様が見逃してくれたように思われた。

(たきのさわ・なおこ)

# このままではいけない？

吉原令子

—他人を責めること—

留学してから一年間、私は自分を責め続けた。「このままではいけない」と思うあまり、自分を否定し続けた。たとえば、日本語のアクセントがある私の英語はいけない、すぐに日本人のようにお辞儀をするのはよくない……。私は日本人らしくなく振る舞うことに時間を費やした。しかし、どんなに白人のアメリカ人女性の真似をしても、彼女たちのようになることはできないのだということに気付いた。目の色も、肌の色も、髪の毛も変えることはできないし、二三年もつちかってきた日本の文化的背景を捨てることはできなかった。

一方で、アメリカのマジョリティに対する私のあこがれは次第に失望と軽蔑に変わっていった。それまで、すべてアメリカ人のすることは「正しく」私のすることは「間違えてる」と思っていたが、留学してから一年が経ち、アメリカという社会が冷静な目で見えるようになってきた。アメリカという国に対する夢もあこがれもなくなっていた。

白人のアメリカ人女性はいつもボーイフレンド優先で、女の友情なんてあったものではない。私はよく



アメリカ人の女性たちに恋の告白のメッセンジャーに使われたり、デートの口実に利用されたりした。「レイコは日本から来て、まだ〇〇〇のアイスクリームを食べたことないのよ。彼女が食べたいと言うんだけど、私たちは車をもっていないから行けないの。あなたの車でレイコをそこに連れて行ってあげましょうよ」などと言葉巧みにお目当ての男性を誘うのだ。私はそのアイスクリーム屋の存在さえ知らなかったし、食べたいなどと言ったことは一度もなかった。「レイコは最高のルームメイトで、親友よ」と言うておきながら、友人を利用する精神が信じられなかった。

また、アメリカ人の無知は私がアメリカに幻滅した大きな理由のひとつである。「アメリカが一番(America is No.1)」と叫ぶ学生。「私、海をまだ見たことがないの」というルームメイト。「生で魚を食べるの?」と気持ち悪がる寮生。「家はアメリカ製品しか買わない」といってパナソニックのテレビを見ているホストファミリー。「日本はいつ中国に返還されるの?」と私に質問してくる大学生。もちろん、自国の問題点や他国のことに精通しているアメリカ人がいないというわけではない。しかし、日本人がアメリカのことをよく知っている人はいない。また、公の場では喜んで人種差別に反対を唱えながらも、個人的な関係や一対一のつきあいになると、途端に差別に目をつむるリベラルな白人を見るのは気の滅入る出来事だった。私が学生時代に教わってきた「メルティング・ポット」とか「オープンでフレンドリーなアメリカ人」という考えは机上の空論でしかなかったことを知った。

そして、留学して二年目、自分を責めるのをやめた私はアメリカ人を責めるようになった。「私は悪くない。アメリカ人がみんな悪いのだ」と……。自分自身のことでもアメリカ人のことも受け入れられるようになるにはあと数年かかった。





夫に向けていた目を、自分に向けたとき、そこにいたのは、自分からは行動を起こせない臆病なくせに、依存心だけは人一倍強い小さな子供だった。自分自身を見つめ始めたときが、私の中の大きな転換期だった。

私は自分が大嫌いだった。小さいときから自信がなく、引つ込み思案で人と向かい合うのがこわかった。感情的で気分屋の母の顔色ばかりうかがっていた。だから成人しても人の顔色ばかり見ていた。自分という人間形成をしきれずに、体だけ大人になってしまった。母親が夫に変わっただけで、私は自立をしていない子供だったのだ。自分を見つめるのはとてもつらかったが、今まで漠然と感じていたことがクリーンになって、自分の長所も欠点も全て受け入れることができた時、私は自分という人間を初めて愛しいと思った。自分を丸ごと受け入れたとき、私は夫をも受け入れることができた。なぜセックスをしないのか、ではなく彼はセックスをしない人なのだ。

彼はバツイチだ。前の結婚の時も、一年ほどでセックスしなくなってしまったと結婚する前に聞いた。何年後かには同じ運命にあるとは思ってもしなかった私は、無邪気に理由をたずねた。

「さあ、なんでだろうな。向かい合うとなんだか笑っちゃって、できなくなっちゃったんだ」  
夫の中に何があるか。それは分からない。でも、私もそうだったように、夫の中にもそうなる因子があるのだろう。彼自身は気がついてもないけれど、彼もまたいつか変わる日がくるかもしれない。その日が来ると信じてみよう。そう思ったらすつと肩から力が抜けて楽になった。

今現在、私たち夫婦はセックスストレス更新中である。これから先、どの程度更新して行くか分からないが、一生セックスストレスを続けて行く気は毛頭ないので、ここ一、二年がまた大きな山かなと思う。

彼がセックスをしたくないのはかまわないから、その場合セックスをしたくないパートナーを見つけてほしいと思う。私はセックスが好きだ。もちろん好きな相手と気持ちのいいセックスに限るが。

肌と肌を合わせるのとはとても気持ちがいい。それだけで安心する。つくづく人間は動物なんだなあ、と実感する。どうしてこんな気持ちいいことしないんだろう。今度ゆつくり夫に聞いてみようと思う。

# 蔦森樹の巡業日記



蔦森樹 タツル

江ノ島に近い鶴沼公民館（神奈川県）で、辻堂公民館と共催の、その名も『男塾・ようこそ男のワンダーランドへ』という、うんとうんと男臭い男性講座が開かれました。6月初旬の第一回目、教室に入ったら頭がクラツときた。もうすっかり忘れていたんだけど、微かな殿方のフェロモン♥に「ウーン、マンダム（古すぎ！）」

二十代から六十代まで四十人もの男性が公民館の催事に集まったというのは快拳以外の何物でもない。他の公民館の人が聞いたらうらやましがらる。働いている男性は新聞に挟まれている行政の広報紙なんて絶対見ないし、地域版の催事情報なんか飛ばし読みするだろう。そもそも働く男たち向けの講座などない。それ以前に通勤する男性にとって『往んでいる地域』との接点など皆無に等しいのだ。

男たちも自分を見直さなければならぬ。その大切さを確信した両公民館の新人男性二人は、上司（男性）が口

をあんぐりするような企画を立て、ただ待っているだけではちが明かないと駅の改札口で帰宅する会社員たちを待ちぶせ！する勧誘作戦を決行！したから凄い。その意気込みが伝わったはずだ。フェミニズムや男性論など知らない男たちが、『地元』を接点に集まった。興味がなくても、何かを日々感じているから参加したのは間違いない。

男性論の詳細は各講師に任せ、わたしはもっぱら場の雰囲気作り。これが連続講座には欠かせないと思う。おもしろかったのは、始まる前のこと。入口で女性がオロオロしていたので、聞いたら夫を送り込んだけど心配だと言う。「だったら一緒に受けたら。オトコだって言い張ればいいじゃない」と誘ったけど、彼女は遠慮した。それで彼らに男オンリーの『男塾』へフェミニンな女性が参加できるかと尋ねたら、返ってきた真顔の答が「オトコだって言えばそれでいい」。いいセンスしてるじゃん。成果を期待しています。



Tami

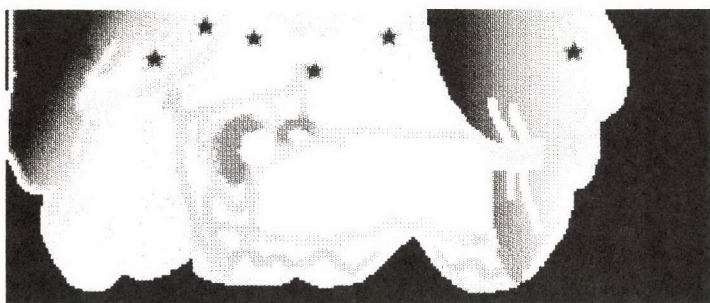
## 居場所考②⑨

だまし絵の中の出産……

水田宗子

少子化が進む中で、幼稚園の生き残り競争については以前からよく見聞きしていたが、先日、産婦人科の〈客寄せ趣向〉を報道していたテレビを見て、すっかり驚いてしまった。

ある産科病院は、妊婦―産婦の部屋を、ローラ・アシュレーのインテリアで、明るく・可愛らしく装飾している。病院といっても、妊婦は病人ではないのだから、病室というのではなく、ホテルのルーム感覚で泊まってもらおうという発想や趣向は、別に変ではないのかもしれない。ある産院では、夫や家族が泊まれる部屋を妊婦の部屋の隣に用意して、こちらはもうまったくホテル並みの設備で、どこにも病院というイメージはない。また、別の産院では、妊婦が無事出産を終えて家へ帰る前に、ホテルでゆっくり過ごすようにと、宿泊券付きのサービスをしている。ホテルには、新生児の世話をする人が待機していて、赤ちゃんの世話はそちらにまかせて御夫婦で〈出産蜜月〉をどうぞ、というわけである。出産への恐れや不快さを最小限度にし、快適に出産をすませたいと欲求する出産消費者がいて、その欲求に高価格で応える出産業者がいると思えば、これらの産婦人科病院の努力も怪しむに足りない。

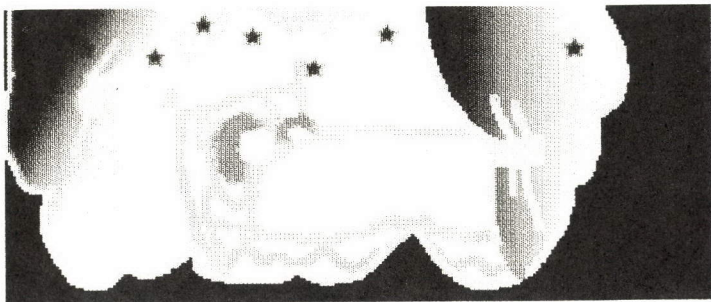


Tami

しかし、私が違和感を持ったのは、ある病院のサービスが、病院での出産の現場を隠してしまおうとする趣向だったことだった。ふつう、陣痛が始まると、妊婦はまず病室から陣痛室へ移され、そこから分娩室へと移動して出産し、そのあとはリカバリールームで体を休めてから病室へ戻るのだが、テレビで見たその病院では、これらのすべてをホテルのように快適な部屋で行えるよう、設備をととのえているのである。

分娩が近づくと、部屋の天井が開いて照明器具が現れ、ベッドの周りには医療器具が並ぶ。快適なホテルのような部屋は、一瞬のうちに科学的な医療室に変貌する。ホテルのルームサービスにあたってくれた人たちが、白衣の医師や看護婦に変わる。そして、出産し終われば、部屋はまたもとのように明るく豪華な空間に戻るのである。それはまるで出産が夢の中の出来事のように、非現実的なものに思えるような経験だろう。日常空間から非日常空間へ、そして何事もなかったかのように再びもとの日常へと帰還する間、妊婦は同じベッドに横たわっているだけで、産みの苦しきも夢の中でのことにすぎず、目覚めれば豪華で快適なベッドにかしずかれているのである。

現代では死が見えなくなったといわれるが、それは人が文字通り誕生から死までを、病院という異空間での出来事としてそこにゆだねることになったからである。現代では、まさに出産も死も、日常の顔の見えない病院という無機質な冷たい非日常の空間や、医師というテクノクラートの手に取り込まれてしまった。そこからまた、最近の、それをもう一度日常の生活空間へ取り戻そうという動きも出てきている。生活空間である家での出産と家での死。生活を一緒に営む人たちに見守られ、助けられての出産や死への願望を持つ人は確実に増えている。快適なホテルのような部屋での出産という、少子化の中での病院経営を模索する、テレビで見た産婦人科病院での試みは、こ



Tami

うした動きとは逆行する。

それは、日常空間の中で生の営みの一部として出産に向き合おうとするのではなく、出産という経験を、人工的な快適空間の中の非現実的な経験として、不可視なものにしてしまおうとしているからだ。私には、アッという間に分娩室に早変わりする、その快適な部屋がシュールリアリズムの絵の中の空間のように思え、そこでの出産は、まるでだまし絵の中の出来事のように、不気味で非現実的な悪夢であるように思えた。出産も、死も、昔からそのどちらもが、家の中で起こる出来事であり、人々に生の始まりと終わりを垣間見させる非日常の経験ではあったが、同時に、それは日常の境界を越える穢れとして隔離され、儀式化されてはじめて、安全なものとして日常の空間との接点を持つとされてきた。とりわけ出産は、産所という生活とは別な空間に隔離され、女たちの手だけにゆだねられて、日常とは異なる特別な注意と取り扱いを受けてきたのだった。

私は、生命の始まりも終わりも、なるべく日常的な時間と空間の中での営みとしてありたいものと思うが、それはその当人と周りの人々に、その経験が生の営みの一部として、日常生活の記憶として残っていくようにと思うからだ。ホテルのスイートルーム化した病室が、一瞬間だけ分娩室に変容して、分娩をあたかも悪夢であったかのように一瞬の出来事として記憶の底へ追いやってしまい、日常では不可視なものとしてしまうような工夫は、出産を日常の生活空間へ取り戻そうという欲求とは似て非なるものだとわねばならない。それは、無機質なテクノロジーによる一方的な支配から分娩という人間的な営みを取り戻したいという願望とは、あきらかに逆行するものだ。

(みずた・のりこ)

おんなが

歳をとるといふこと

木村栄



ふと陽射しが陰って、ペランダの辺りが騒がしい。居間に座ったままガラス戸越しに見やると、大きなカラスが二羽、バサバサと羽音をさせて物干し竿に舞い降りたところだった。肢を引っかけたか、靴下干しが揺れてガランガランと音を立てている。一杯に羽を広げて身近に迫ったカラスは、予想外の迫力。ヒッチコックの「鳥」を連想

して思わず身がすくんだ。

数日後。ゴミ置き場の前に妙なゴミが置いてあった。カラスの巣である。シユロの毛や枯れ枝、ビニールの紐などで作ったどんぶり様の巣が、周囲を分厚く組み上げた基礎部分にがっちり支えられている。その建材は、なんと針金をビニールでコーティングしたクリーニング屋のハンガー！

五〇本もあるだろうか。黒、白、青、緑のカラフルなハンガーがしつかりと絡み合って、不安定な枝と枝の間に巣を取り付けるには格好の土台だ。

先日の騒ぎは、物干しからハンガーを掠め取る作業だったらしい。

巣はマンシヨンの中庭の樫にかかっていたそうだ。滑り台のある遊び場に木陰を提供している大木である。抱卵時のカラスは雛を護るために攻撃的になって、何をするかわからない。子どもが襲われてからでは遅いと、植木職

を頼んで取り払ったということだ。

作業の間中、付近の木にとまって一部始終を眺めていたという二羽のカラスの、無念の心中が察せられる。

幼子の親だった頃の私なら、若い母親たちと同じように早く処理してよかったと思うだろう。なのに今は、様変りした「森」で苦勞して作った巣を目の前で壊されるカラスに同情している。

体を張って護るべき者のない気楽さというより、生のエネルギーに満ち満ちていた頃の感情を、今の心身に再現させるのがしんどいのだ。間近で見るカラスを怖がる一方で無責任に同情する感傷に、ふと心の体力の衰えを感じてしまふ。

すでに辺りは緑濃い初夏の気配というのに、心に広がる風景が「枯れ枝にからすのとまりけり秋の暮れ」では、シヤレにもならないのだけれど。

(きむら・さかえ フリーライター)

少年の暴走に歯止めをかけられなかったのはなぜか

# 今、大人はおそろしく

◆久田邦明

神戸市須磨区の小学生殺害事件の容疑者が逮捕された。そのことを知って、ああ、地域社会も学校もこういうところまで来てしまっているのだなあと思った。以下は、容疑者の少年が犯行を行ったと仮定した上での話である。

わたしは、この事件そのものについては極めて単純なことだと考えている。一言でいって、少年の行動がエスカレートする過程で歯止めがかからなかったことが問題なのだ。異常な犯罪を起こす人間は、いつでもいるし、どこにでもいる。たとえ少年であっても例外ではない。「どうして、あんな残酷なことを」と驚いてみせる人は、

人間というものに対する自分の浅薄な認識を告白しているだけのことではないか。

そうだとすれば、人間のそういう行動に対して、ある程度のところでは歯止めをかけることができるかどうか重要な意味をもつことになる。歯止めといっても、道徳観とか宗教心とかいったややこしい話ではない。少年の行動を気にかけて止めさせる人間が周囲にいるかどうかだ。猫や鳩を虐待したり、小学生や中学生に乱暴したりする段階で、周囲から何らかのはたらきかけがなされていけば、これほど行動が一直線にエスカレートしていくことはなかっただろう。

学校教育が抱える問題についても、このことが当てはまる。比較的確実な事実と思われる例を挙げて考えてみる。四月中旬、少年が同級生にひどい暴行を加える事件があったという。とすれば、なぜそのとき、教師は、これを傷害事件にしなかったのだろうか。教師の最善の指導とは、そうすることだったと思う。ところが、実際にはうやむやに済ませてしまつたらしい。歯止めをかけることができなかったのだ。

ただ、そうはいっても、この中学の教師だけを責めるわけにはいかないだろう。今日の学校は、どこもこれと同じような対応をしていると考えられるからだ。「子どものために」と、もつともらしい理屈を並べながら、実際には問題をやり過ぎているのが、今日の学校の姿ではないのか。この点、民主主義の理念を処世術として身につけたただけのようにみえる戦後世代の校長たちの責任は重い。

もう一つ、この中学の教師だけを責められないのは、教師のこのような対応には世論の支持があると考えられるからである。この事件を巡って、学校や教師への批判が続いているが、見当違いも甚だしい。「もつと子どもを理解するべきだ」という批判は、批判の方向が間違っ

ている。教師に可能なことは、少年の暴力を傷害事件にするというように、教師の手に余る問題については、そのことを率直に認めて、子どもに対して社会の壁を提示してやることなのだ。このことを大人はいまだに理解していないらしい。教師はそういう世論の動向に押されて、結果的としてイイカゲンな対応することになつていくのだ。

十四歳から十五歳までの少年の場合、刑事責任は問われるが裁判で処理されないために、少年法を改正するかどうかで意見が分かれている。わたしには、この議論は、自分が無力になつていくことを認めたくない大人たちによる見当違いの反応のように思われる。少年法とは、青少年の健全育成を目的とすることからも分かるように、歯止めの役割を期待されたものである。先に挙げた例に即していえば、前科が付くわけではないのだから、教師が傷害事件にしたとしても、それほど問題はない。むしろ、そういう対応によつて、少年たちの行動がエスカレートしていくことを防ぐことのできるものなのである。それがうまく機能しないのは、少年法のせいなどではない。大人が無力になつていくことにこそ問題がある。改正に賛成にしる、反対にしる、少年法について議論する



前に考えなければならぬのは、そのことである。問題をごまかしてはいけないと思う。

このように考えると、ニュータウンと呼ばれる地域社会の問題を無視できないだろう。ニュータウンこそ、少年の行動に歯止めをかけることができないで、エスカレートしていくことを放置する条件が揃ったところなのだ。それは、ニュータウンというところが、雑然とした要素が排除され、サラリーマンの画一的なライフスタイルが支配する空間になっているからだ。

この事件について、ニュータウンに住む、ある母親と話したところ、彼女の住むエリアは、大手企業に勤務する粒ぞろいの家族が住むところで、東京大学などの有名大学への進学者が辺りに沢山いるという。そういった地域は、人間生活の多様性の失われた、いわば漂白されたところだから、そこから逸脱した子どもと親の場合、かなりの無理をして独自の価値観を打ち立てない限り、とても肩身が狭いらしい。あの事件が起きた地域も、これと似たところだったのではないだろうか。そういう地域では、親は自分の子どもが学校で問題を起こしたとしても、何とかその場を穏便に済ませる方法を必死で追求することになるのだろう。歯止めをかけるチャンスを、自

分から手放してしまっているのだ。

それにしても、若い世代の状況はどうなっているのだろうか。昨年から今年にかけて、盛んに話題になったアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』の主人公シンジは、あの少年と同じく十四歳だ。この物語では、エヴァという戦闘ロボットを操作できるのは十四歳の少年少女だけという設定になっている。そして、シンジをはじめとする登場人物はいずれも、エヴァの操縦席に座らない限り、空虚な存在としての自分を持て余している。つまり、彼らは、能力を発揮して良い成績を取るといった具合に、何かを成し遂げたときには認められるが、ありのままの自分を認められることはない。彼らは、その意味で、それこそ犯行声明文にあつたように「透明な存在」だ。

同世代によるこの事件に対するコメントに、少年に同情的なものが目立ったことに意外な気がしたが、このようなシンジの事情を考えると、彼らの発言にリアリティを感じないわけにはいかない。

(ひさだ・くにあき 神奈川大学講師。専攻、教育学・社会教育史。

We 九五五年四月号「複眼で見る」にインタビュー掲載)



# バックナンバー一覧 1992年～1996年

◆Weも6年目を迎えました。在庫が多数残っておりますが、資料として有効に使っていただければと思っています。お友達へのプレゼントとして、またお手元に残っていない特集号などこの機会にぜひお買い求め下さい。

◆92年度～95年度(1号～40号)は、一冊300円、96年度(41号～50号)は一冊500円です。まとめてお買い求めの場合、10冊以上は9掛け、20冊以上は8掛け、30冊以上は半額(ただし送料の負担をお願いします)とさせていただきます。

×は在庫切れ、○は在庫があります。

## 94年度 一冊300円

(94年4月号～95年2/3月号)

- 4月号(21号) 家族への郷愁
- 5月号(22号) AIDSと性
- 6月号(23号) 男は語る
- 7月号(24号) 産むのは私
- 8/9月号(25号) 多民族共生社会を生きるⅡ
- 10月号(26号) 教育  
一つながりをとり戻す
- 11月号(27号) 自分の福祉を創り出す
- 12月号(28号) 食から見える世界
- 1月号(29号) 女が働くということ
- 2/3月号(30号) リブの復権

## 92年度 一冊300円

(92年4月号～93年2/3月号)

- × 4月号(1号) くらしと教育をつなぐ
- × 5月号(2号) 男から男へ
- 6月号(3号) 夫婦別性と家族の再編
- 7月号(4号) 教育—絶望? 希望?
- × 8/9月号(5号) 汚れとつきあう
- 10月号(6号) いま、家庭科ホットライン
- 11月号(7号) <高齢化社会特集号>  
シルバーからゴールドへ
- 12月号(8号) からだは語る
- 1月号(9号) 出会いの歴史を作るⅢ
- 2/3月号(10号) 自立と共生のはざまに

## 95年度 一冊300円

(95年4月号～96年2/3月号)

- 4月号(31号) 戦後教育—考える病
- 5月号(32号) 身体のルネッサンス
- 6月号(33号) ゆらぐセクシュアリティ
- 7月号(34号) 家庭科の世界は万華鏡
- 8/9月号(35号) 戦争を語る
- 10月号(36号) 民族とアイデンティティ
- 11月号(37号) <福祉特集号>  
援助と共生
- 12月号(38号) 住空間を考える
- 1月号(39号) 装う
- 2/3月号(40号) 私のことは私が決める

## 93年度 一冊300円

(93年4月号～94年2/3月号)

- × 4月号(11号) 近代教育を超えて
- 5月号(12号) 過渡期の男たちへ
- × 6月号(13号) 家族を疑う
- 7月号(14号) 多民族共生社会を生きる
- 8/9月号(15号) 地球を救うために
- 10月号(16号) 創る—共修の家庭科
- 11月号(17号) 性を語る
- 12月号(18号) つながるいのち—死と生
- 1月号(19号) 病、障害を分かちあう
- 2/3月号(20号) しなやかにフェミニズム

## 96年度 一冊500円

(96年4月号～97年2/3月号)

- 4月号(41号) 学校に風穴をあけよう
- 5月号(42号) 自分を好きになるために
- 6月号(43号) 性の自己決定
- 7月号(44号) 女が元気になるために
- 8/9月号(45号) 家庭科が学校を変える
- 10月号(46号) 神なき時代を生きる
- 11月号(47号) 女性と暴力
- 12月号(48号) ♪感じること♡から  
始まる人権教育
- 1月号(49号) からだで感じる地球環境
- 2/3月号(50号) 女性と自己表現

◆ご希望の方は、電話かファックス(TEL/FAX 03-3424-3603)、あるいは郵便振替(00130-7-754314 フェミックス)にて、第○号、○冊と明記してお申し込み下さい。

■連載

「おんなが歳をとるということ」木村栄

「シネマの魔」武田秀夫

「変な子じゃないよね」滝野澤直子

「いきいきごんぼ」桑田良彦

「このままではいけない？」吉原令子

「蔦森樹の巡業日記」

「セックスレスなわたしたち」

「居場所考」水田宗子

■女と男の家庭科新時代

「フェンスをこえて」小平陽一

「私の家庭科ラブ・スケッチ」

「授業風景—風がかわる匂いがかわる」

「楽市楽座」加藤昭仁

「かる〜い 家庭科相談室」

「共学家庭科 論争」

「オホーツクの潮風荒く」江口凡太郎

くらしと教育をつなぐWe

1997年8月1日発行 第6巻第5号(通巻55号)

定価630円(本体600円)年間購読料6800円(送料共)

郵便振替 00130-7-754314フェミックス